

川柳塔

昭和五十六年八月二十五日印刷
昭和五十六年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六五二号



日川協加盟

No. 652

九月号

社 告

川柳塔社の事務所と会計室は九月一日から左記に移転いたします。投句・投稿は新事務所へ、送金は新会計室へ願います。

事務所 〒546 大阪市阿倍野区三明町二丁目一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号室

電話 〇六(六二九)六九一四番

会計室 〒581 八尾市中田二一三〇二 高杉鬼遊方

電話 〇七二九(九八)〇九二八

振替口座 大阪・三三三六八番

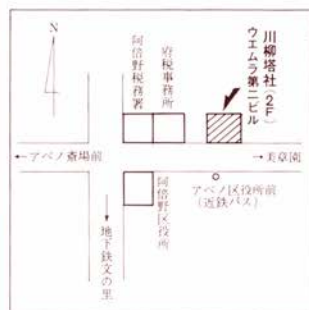
川柳塔社

★阪和線美章園下車西へ五分

★地下鉄文の里下車北東へ七分

★近鉄バスアベノ区役所前スゲ前

午前十時から午後五時まで、係が在室していますから、お手隙の方はご遠慮なくお越し下さい。



姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

祝板尾岳人君金剛山五〇〇回登頂(二句)

金剛山へ五〇〇回登る莫迦でよし

登山靴の紐しめなおす五〇〇回

お口上手にのせられている藍浴衣

養毛剤のおろかしき値を信じ

天牛の棚を見上げる長い顔

西尾 栞

川柳塔九月号

マ ナ ー

先日、近鉄八尾駅から電車に乗った。入口に座った女性が二人、脚を組んで仲良く話をしてた。その前を通るのに組んだ脚が邪魔になったので、僕は持っていた新聞で、お行儀が悪いよと言って、一つずつ叩いてやった。二人はびっくりして脚をほだいて僕の顔を見た。鳥打帽を冠って髭をはやした顔は、ニヤニヤと笑った。見ればかなり教養のありそうな女性であった。次の駅で一つ席が空いたのでもそこへ座ると、前に三十前後の男が腕を組んで、俺の脚はこんなに長いんだぞと言わん許りの格好で、まるで自分の家の応接間のソファに座っている姿であった。この脚も叩いてやろうかと思っただけ、やめにした。

この頃電車に乗るのが嫌になる。全然乗車マナーがなっていない。之はなんとかせなければならぬ。日本の国が道徳的につづれると思つたら、この間、阪急電車に乗ると、貼紙があつて、その貼紙の絵に、脚を組んでいる足先を大きな植木屋の木鋏でチョン切つていふところを描いてあつた。

流石、阪急さんだと思つた。そしてこの画を、各乗り物に貼つて、悪いマナー解消に役立てて欲しいと思つた。

悪いマナー許りでない。今年の三月に四国巡礼に出た。徳島市の眉山の頂上にある国民宿舎で感心したことがある。二泊したが、その風呂では何時入つても、湯桶はみんな隅

にうつむけて揃えてあるし、腰掛もその通りであつた。僕もそれを見習つて、出る時は腰掛に湯をかけて洗い、湯桶の湯をきつて、隅へ揃えて出た。このマナーはこの温泉へ行つても続けようと思つた。

鯖大師というお寺でこんな良いことが書いてあつた。

子供を叱るなよ、みんな歩いて来た道ぢや
年寄り嗤うなよ、みんな之から行く道ぢや

この言葉を手帖に書き止めてみると、暮六時の鐘がいんいんと響いて来た。

座右の句

まっすぐに行けばどっかへ行ける道 (古方)

私の句

余生への覚悟白髪にうながされ 安藤 寿美子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

マナー 西尾 葉 (1)

一茶回想 尼 緑之助 (2)

川柳塔 (同人吟) 西尾 葉選 (4)

■川柳太平記(40) 浮世絵の終焉と漫画の登場 東野 太八 (24)

■連載 俳風柳多留廿六篇研究 (三丁) (26)

56年度二賞中間発表 (28)

水煙抄 正本水客選 (32)

秀句鑑賞 同人吟 濱野 奇童 (31)

「水煙抄」 山内 静水 (45)

愛染帖 橘高 薫風選 (42)

私の台風記 阿部 柳太 (46)・大矢十郎 (46)

長野文庫 (47)・原田明春 (47)

一茶回想

尼 緑之助

目出度さも中くらいなりおらが春 一茶
やせ蛙負けるな一茶ここにあり //

『一茶、あれは川柳ですよ』などよく言
ったものだが、一茶を充分究明してからのもの
ではなく、一般に膾炙されている一茶観の
域を出ていないから冷や汗ものだ。

構造社刊『川柳』昨年三月号に俳人金子兜
太氏のインタビュー記事の中に『短詩型に対
する向い方が、俳句も川柳も同じ基盤だ、と
いう認識から出発している云々』また、昨年
末NHKが川柳を取り上げた際ゲストとして
兜太氏登場、同氏の発言に川柳に対する理解
度の高さに胸を撫でたことである。

『川柳』本年三月号に宮坂斗南坊氏が『一
茶を俳句作家としてよりも、もっと広い意味
で、俳諧作家であり、当然川柳をも包含する
もの云々』

また『なお、現代俳句が花鳥諷詠や季題趣

金剛山へ私達も登った……………石垣花子・青戸田鶴・沢田千春…(49)

桑原伊都・八木千代

「始 発」……………植山武助選…(50)

一路集「花 束」……………大森孝華選…(50)

「 鮎 」……………増田竹馬選…(51)

初歩教室……………本田恵二郎選…(52)

柳界展望……………川村好郎選…(54)

大萬川柳「特別」……………川村好郎選…(56)

本社八月句会……………川上大輪選…(58)

一分間の柳論……………川上大輪選…(59)

各地柳壇へ佳句地10選(井上柳五郎選)……………(65)

編集後記……………薫風・酔々・鬼遊・史好…(69)

座右の句

振りむけばやっぱりついて来る妻よ (路 郎)

私の句

普段着の女に母の顔ダブる 那 須 鎮 彦

味を前提とする限り、反社会的存在となり、人間を中心とする文学から遊離する疑いがあるのである。人間を中心とする俳諧の主流は現代川柳が担当せざるを得ない云々」
ここで一茶の解明から柳俳に及ぶべきだがスペースが許さない。

川柳が生まれてから二百有余年とされているが、生まるべくして世に出た理由、それを支えた国民、時代の背景等を思うとき、これからの川柳はどう進むべきかということにつき当る。兜太、斗南坊の意見と共に一茶が浮かび上がって来る。

柳俳共、作風の変化が多岐となり、賛否の声が大きくなりつつある。

この流れの多様さは、社会全般の思考の多様化と併行している。

芭蕉によって俳諧のこころを低俗視する

(芭蕉一人ではないが一応これに代表してもらふ) 思考も生き続けているが、こんな中にも俳諧精神は立派に生き続けている。人間の詩として捉える限り。

いつの時代にも右に向く者があれば、左に向く者がいる。今後の柳俳はどこに辿りつくであろうか。小林一茶の在り方に惹かれるこの頃の私である。



西尾 栞選

太郎冠者へそを押える稲びかり
八尾市 香川 酔々

鴟尾二匹入道雲の目のあたり

セスナ翔ぶたかが家具屋の広告で

年金のこと考えている廊下

荷物などいらぬひとりの草枕

束の間の自由ミナミで補導され

倉敷市 野田 素身郎

肺腫瘍のため入院

梅雨明けがいつになろうと入院中

同病同室そのうえ野球もタイガース

カラ元気へ大きく相槌打つ見舞い

ネオン街にちよっぴり未練がある手術

ボーナスの使途狂わせた肺切除

カラオケのレパートリーが減る肺切除

八尾市 高杉 鬼遊

ヒロシマの天ふかくする赤とんぼ

不幸とは貧しいことでないらしい

呉服部へ来ると娘もしおらしい

バカンスも出稼ぎも持つ紙袋

山賊も仕事を休む月の宴

傷のある壺ほど情け深かりき

大阪市 小出 智子

出産の便りが届く夏最中

夏が好きだった頃の藍ゆかた

八月の炎天をゆく義理一つ

夾竹桃咲いて振り向く人もなし

老眼鏡で見るとがっかりするだろう

母が居て誰はばからぬ男客

大阪市 柳原 静香

美術館巡り綺麗な汗をかき

いざと言う時聴えない身の怖さ

老いて娘に従うているにぎりめし

猫の足拭いて内孫欲しくなる

聴えない妻でも側に居る安堵
喪服着てさえ女のにぎやかさ

残念石昔を今に修羅動く

順風満帆こんな余生で結構すぎ

妻利口減多なことで腹立てず

米寿までしばし間があり自伝書こ

本寺改築

墓地整理御先祖様が移転され

愚かなる者がつくった核兵器

だんだんに大言壮語尻すばみ

つぎはぎの人生なりき恥多き

生まれては名前死んではまた名前

人間も角がとれるとヤマを越し

亀此処に眠る交通地獄の地

ありあわせ食べてる食堂員の昼

気位も結婚適齢期には勝てず

二兎を追う驕りを神に咎められ

名誉欲減るとカネまであっち向き

神の声などとは少しおこがまし

逃げ道を開けておくのも情なる

停年が近づき人間らしくなる

東大阪市 市場 没食子

青森市 工藤 甲吉

大阪市 川口 弘生

今治市 長野 文庫

大安という日があって不安ある
腕章を巻いて正直そうに見せ

生きるため無難な中間色を撰り

満腹になつて主張がやや軟化

石槌で生れた雲は雷を抱き

障害年哀れな所作にカメラ向け

溜息をきいて愛犬横を向き

岳人さんへ（金剛山登頂五百回記念）

約束も五百果した山男

輝いて真珠に負けぬ芋の露

狂い出せば火の輪ともなる念珠の輪

神さまの鞭もきこえる風の中

先輩として断われぬ靴を履き

油ぎった顔で福祉を議論する

毒舌が過ぎたかその夜 食あたり

はしやいでの酒はさみしいことがあり

真夏日に汗をかかない偽善者め

病状を聞けば空咳二つ三つ

皮脱いで貫く竹の節度かな

合槌を打ってわたしを見失い

雨もりの音にあの日を聞かされる

今治市 月原 宵明

米子市 八木 千代

松原市 谷垣 史好

倉敷市 水粉 千翁

哀歎のドラマににじむ銀の雨
私を叱つてなにもかも許す

岡山県

嘉数 兆代賀

金運はないが病院など知らず
路傍の石になり得ず母の背が曲る
見えすいた嘘をもっともらしく聞き
つまずいた石を土台にして伸びる
生かされて生きて夕陽へ手をつなぎ

尼崎市

黒川 紫香

一十一 三になりそうで式を挙げ
老いらくの恋をホホホとかわされる
来客もステテコ素麺喰べながら
ゴキブリになって都会で生きていた
百羅漢峠の道はよく曲り

鳥取市

河村 日満

もう親しさがなし真四角な返事
官庁の賞与ねたんでいる活字
職がある男の幸の大ジョッキ
男気を出して十日の診断書
嫁がきて老後天ぶら攻めにあい

竹原市

山内 静水

騙されて騙して笑顔をくずさない
政治屋の売る毒けしの但し書
だあまって玩具のバケツに貰う砂
目を三角にして妻にらんで笑ってる

皿書へ陶工野菊を添えてくれ

泉佐野市

阿萬 萬的

詩人喋らず小さな散歩から帰る

清貧の色です無人駅の花

よく喋るねえ通勤車の女学生

ゼンマイ仕掛鳩小刻みに餌を拾う

運のない人だとしみじみ妻も云う

倉敷市

小野 克枝

台本の通りに並ぶ朝の靴

先付けの小切手貰うひれ伏して

赦せない男へおにぎりだけ持たせ

最善をつくした足が湯に透ける

人間の敵はひとり夜の底

鳥根県

堀江 正朗

音と音すき間は妻の字で埋める

口下手が電話横取りして話し

あんなとき笑顔のできぬ脆さ知る

見えぬから背を向けたら負けになる

見られてる指の動きのはずかしさ

鳥根県

堀江 芳子

苦を抜けて古稀環曆の差し向い
うつとりとさせた値札に驚かされ
とうさんと呼ばば安堵の夫の顔
神棚へお隣りへ初物いそいそと
ひよっとくる気がしてコトコト鍋が煮え

倉敷市 田 垣 方 大

点滴は大の男を縛りつけ

絶食へビニールパイプだけの呼吸

医師が出て俺の視線を妻は避け

聞き耳をたてると病室皆だまり

姑と来て他人行儀な母を見る

和歌山市 野 村 太茂津

忠実にテーマを追えば足払う

苔を育てていつも俯く癖がつく

無器用な指を嗤うて苔育つ

凶太さにつくり笑いをして勝てぬ

軽妙なタッチで逃げる持ち時間

大阪市 金 井 文 秋

お達者でんなど云われる齡になつてくる

単調なりズムで暮す老いの日日

鉢植がたとあるのに造花くれ

愛用の樂しさが無い使い捨て

コマージュ程はゴキブリ弱くなし

倉吉市 奥 谷 弘 朗

親孝行したくない時親が居り

百姓の海外旅行の世と変り

窮屈にする花嫁と妻案じ

想像でものを言うのが玉に傷

器用だが貫禄面でおしまれる

大阪市 中 川 滋 雀

柏手の冴える朝なり今日がある

切れぎれの夢もつないで夫婦坂

聞いて欲し愚痴が待つて冷や奴

自販機の礼も言いたい音で出る

確率が当って駅の迎え傘

大阪市 河 野 君 子

子供部屋のコントひとつずつ消える

ひとつひとつ罪をつなげば数珠の輪に

決心はつかずに紅を二度三度

招かれた旅もいくさのもののうち

一筋の流れに沈む夫婦かな

藤井寺市 児 島 与呂志

胎教へ酸漿の音気にかかり

故郷の西瓜は井戸で冷えてくる

こんなにも患者が待つてうろたえる

こみあげる笑い退院間近なり

看護婦がせかせか患者追いぬかし

京都市 都 倉 求 芽

梅雨明けの雷公へ拍手贈りましょう

万物の霊長がゴキブリに扮し

無人駅の方が掃除ゆき届き

遠吠えも遠吠え地球の裏側で

棚いっぱい人形が笑っている不気味

遠くいて愛は心を深くする

兵庫県 遠 山 可 住

十円でガチャッと切れる子の電話
雨の音しばし日本人になり

東京のホテルで我が家の花と会う

人間のはびこり過ぎを神案じ

神戸市 中村 ゆきをを

乗りかえも連れの方まで席を取り

売切れてしまうと梅の実買走り

名物の裸おど日も定年に

留袖によく会う日なり娘は三十

弁護士は別な心で聞いている

鳥取市 鈴木 村諷子

滾々と枕の上の湧く清水

気まぐれと言うて内心自負をもち

弔電を誰にむかつて披露する

たのまれても首相などになるものか

ざまあみろいと死んでやりたい時もあり

岸和田市 高橋 操子

残された柿は淋しいひとりごと

いかに世は変れど義理の重たさよ

その中に一人居るから皆狂う

情熱を秘めて水蓮赤く咲き

水蓮満開守衛の様に鯉が浮く

富田林市 岩田 美代

敗けておこうふり向く事のないように
すばらしい噂だから信じとく

冷静に聞いてたつもり風騒ぐ
節くれの握手楽しいことがあるように
入道雲哀しい貌に見えてくる

西宮市 藤村 女

告白を聞く公園はおぼろ月

女が女賞める言葉に刺がある

玉三郎の女に見入る女の目

叱つてる方も泣いてる影法師

ときめきがまだあり女お洒落する

大阪市 西村 花村

タコのような若者の脚 優先席

赤ちゃんも青い空見る梅雨が明け

大いなる茅の輪をくぐる小さい足袋

尾てい骨明治の男たよられる

アンパンを貰って迷い子しやべりだし

八尾市 宮西 弥生

本物の道は一本しか見えぬ

花束の顔は実力疑わぬ

かくれんぼかくれた日から戻らない

女から別れる切れろと言う世情

女もう恐いものなし大ジョッキ

八尾市 高橋 夕花

蛇口から水が出てくる都市砂漠

祭り太鼓の汗なら進んで流すべし
母の形見いまだ纏うたこともなし

切り花をいとしく思う誕生日
塩壺が湿つて長い夏がくる

島根県 小砂白汀

新盆を迎う（一句）

萩桔梗むらさき精霊憩われよ

花いっぱい運動サルビヤだけ目立ち

石庭に立てば聞こゆる溪の水

民謡というヒモ付けて子を放し

わかるときがあるさと父の目澄んでいた

竹原市 小島蘭幸

昼の風呂玄関の鍵掛けてある

梅雨明け宣言やっとおしめが取れました

一歳の歓声やよしミニプール

勝算がないので橋は渡らない

もう一人の私とやがて陽は昇る

桜井市 岩本雀踊子

忘却の中で生きてゆく月日

裏切らぬ味方で少したよりない

夫唱婦随昼寝にそんな夢を見た

花道のない仕合せが母にある

私語にしておこうどうせ他人と云う世間

寝屋川市 江口度

クラクシオン皆んなが鳴らすときならず

よく知っていますとつきに名がでない
主婦の役ばかり便利になっていく

イソップの蛙それからよく眠れ
眼のやり場うれしく外らす夏が来る

島根県 榎原秀子

紋白蝶つかず離れず夫婦かな

むなしさよ雨の舗道に蛾のむくろ

貫い泣きしてきく話の重いこと

意識して昔語らぬ祖母がいる

釣糸を親子が違う場所であれ

大阪市 津守柳伸

憶病なカラスは群を抜け出せず

平凡なしあわせでいい風ぐるま

勘忍の限界がある昼の月

もろ肌を脱いで女の夏祭り

夕立が五分狂った洗濯代

松原市 玉置重人

孫が来る墓も蜥蜴もかくれろよ

オアイコにしたいと思う負けている

制服を着る制服用の仮面つけ

河内弁すぐに香車になりたがり

年金譜また慶弔のベルが鳴る

大阪市 本間満津子

貝になりええおばあちゃんてなんだろう

お手洗いでしみじみ我が家だと思ひ

法事にもいそいそ生きている者同士
仏の意志ですとあの世の顔借りる

赤信号お地藏さんは見てはった

八尾市

納

糸葉

奈良県
村上春巳

葱坊主誰を待つてゐるわけなし

角砂糖熱いなさけにすぐに溶け

恋一途坂を登って行つた毬

兄弟の輪の真中に母が居る

他人の子も抱けば慈母観音になる心

大阪市

清水健司

大阪市

神夏磯道子

善人がお金を持って並んでる

材木を並べて横になる大工

むしむしとする日は包丁隠しとく

裏切りの手紙がこない負けいくさ

寿司追加みやげに持って帰る分

香川県

岡田拳法

京都市

山本規不風

核のカサ米ソか自前か白旗か

非核だけ唱えずシエルター頼んます

議員定数減らせば行革ホンモノだ

一院でよろし討議の中身です

財政逼迫されど役人のポーナスよ

和歌山市

西山幸

和歌山市

若宮武雄

振出しへ戻る満員バスに乗る

吊皮にやりなおす氣を試される

千涸びたおんなを隠すサングラス

休日サラダへいのちいとおしむ

正確な時計が信じられない日

奈良県

病床の笑顔に見舞い救われる

場違いの様な女のサングラス

池の端靴が一足ある恐さ

ここまでは見せます夏を派手に着る

鹿通る径で突然プロポーズ

大阪市

ああ余生夫婦げんかもしなくなり

その話題反らせる術をいつからか

雷が来ると可愛い妻になる

使い捨てそれでいいのです妻ようじ

ブラジルのコシヨー楽しいサラダ鉢

京都市

ときめきをもらって縁はあきらめる

いやがらせの風受けて起つ罪を避け

云うままになって本心雲のよう

やっぱりと易が当った悪いほう

とりまきの目はよろめきを待つている

和歌山市

風鈴を吊って季節に親しもう

慇懃に構えて距離を見計らい

躓けぬこは大事な古稀の坂

幾度か弾き相寄る夫婦独楽

通り魔も辻斬りも出て文化都市

奈良県

村上春巳

奈良県

村上春巳

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

奈良県

神無情身障者に両笑くば

無職とか多額な金を盗まれる

議事録にはつきりさくらのタイミン

自叙伝は作家そろそろ行き詰り

幸せは妻の味方に嫁がつき

町田市 竹内紫 鏑

豪放は消え半匙の砂糖かな

測量の望遠鏡と取材班

もう快いんだが折角乗った救急車

囑託の語彙は豊かでみな無口

井戸端の進歩ロビーにゼロックス

和新山市 浦野和子

確信の一言千の矢も辞さず

ボケと突込み夫婦でまわす糸車

家捨てるノラは金魚になりました

露草を踏んで千夜の恋とかや

今日も亦同じパターンで昏れた悔

堺市 大道美乙女

なすこともなくて追うてるタバコの輪

マイペースの歩巾知ってる朝の靴

骨蒸しの骨まで愛す舌つづみ

五寸釘まともに受けたワラ人形

玉砕地骨を遊山の人がふむ

兵庫県 辻 文平

一ト言がこんなに荒れて行く落日

茶を立てて涅槃の風に埋れる

胸の灯が炎えて十円玉足りぬ

梅雨空へ鉄もて鉄を打つ火花

鳥取県 福田保子

紬織る指に宝石など要らぬ

先頭を信じる知恵は蟻も持つ

春の野を走ってみたい車椅子

無遅刻の誇りへ母の愛がある

人情に触れた日亡母を呼んでみる

富田林市 板尾岳人

莫迦でよし五百の峰に樹の匂い

標高一二五米×五〇〇回

王様の背中に山の峰背負う

手品師に教えてならぬ山の峰

父の樹に逢える五〇〇へ滝があり

平田市 久家代仕男

開発のそれ見たことか崖くずれ

有情は苦悩と気づく日の遅く

丹精の素直に伸びた茄子の艶

袋掛ころは秋に梨娘

島根県 藤井明朗

釣糸を巻く手ごたえにだまされる

気がねする事もないのに母の愚痴

老いの幸せかも孫の肩車

花活けて心おちつく詩日記

島根県

西村 早苗

強がりを云うてゐるうちは酒があり

大阪市 天正 千梢

おだやかな雨へ牛乳届く音

ライターを切る間和解の語を探ぐる

ぎりぎりのくらしへ赤い花燃える

新宮市

大矢 十郎

牛肉も天寿を待てば固からう

税金を増しては政府無駄費い

四島を返えせと言えは寝言めき

アメリカが恐れる軍備ならしたし

堺市

藤井 一二三

祇園ばやし京の男の玉の汗

にらめっこ生きるマツ毛を入れる宵

総入歯豪華な金の嘘をつく

世を捨てた尼僧に長い夜もある

米子市

林 瑞枝

土間涼し旧家の重味ずしり来る

ポケットに不倫の思いで抱く名刺

鉢いじるその横顔に過去は消え

はぐれ蟻野点ての膝で空廻り

高槻市

若柳 潮花

窒息をさす程軍備押しつけて

匂い無き造花が憎いほどに燃え

どのように逃げても影はつきまとい

落書の人は消さずに他所へ嫁き

大阪市

天正 千梢

余生とは楽しきものよ菊の鉢

氣にくわんで眼鏡の色を替えてみる

国鉄に奉公している旅続け

酔うほどに満州の夕日はめちぎり

岸和田市

福浦 勝晴

熟年の粋なベレーに派手なタイ

大声で怒鳴ると入れ歯とびそうで

個人的見解で行くパチンコ屋

ニワトリを締めるとどこかの鶏が啼き

生駒市

草深 醉升

思いきりやれとは他人のことだから

老いの眼に写る歴史の繰り返し

老いらくのいたわり合せて電話切る

核めぐる虚虚実実の知恵くらべ

倉敷市

稲田 豊作

宿坊の一夜うき世を遠く寝る

結ばれぬ縁です虹はもう消えた

信じたい人に背かれ午後の雨

湯上りの乳房に風が触れたがる

和泉市

西岡 洛醉

ある孤独空虚の中で死を迎え

一瞬の誤算坂道駆け出し

悠々自適とは行かぬ税の高

善人の肩幅薄い儘で朽ち

高槻市 福田丁路

商店が会社になって役でもめ

容赦なく残り二本の歯も抜かれ

四苦八苦咲かせた花を盗まれる

代筆の祝辞を読んで胸を張る

柏原市 大峠可動

雑兵の日記いくたび自己嫌悪

ほうずきの色は少女にしかやれぬ

走っても走っても充実とは書けぬ

灯りつけると夫婦の話になる

兵庫県 河原みのる

学園の遂にお札にまで及び

ホトトギス ホタルも知らず夏は来ぬ

いっそもう呆けたふりして暮らそかな

伊達でない杖とそろそろ認められ

宝塚市 傍島静馬

下積みの要求までも善処で立消える

食うて寝て孫と遊ぶのにくたびれる

取り込みはされるしサツでは絞られる

へそくりの穴場へゴキブリ紛れ込み

岸壁の主遊っても歌は生き 出雲市 原 独仙

まだ生きているのを不思議そうに言う

「一寸待て」ここは自殺の名所とか

冷奴君も巨人か意気投合

唐津市 新岡回天子

犬の子があんなに可愛いかわいはず後家

学者とは世間知らずのわくにいる

他人から見れば幸福あんなだけ

一本の瓶党籍ゆるがす武器となり

松江市 小林 孤呂二

甲羅干す女を娶るなどしない

ひと言値切ってみるのも主婦の意地

素干しの梅の香りへ巡る夏

直球で勝負されている熟年

松江市 柳 楽鶴丸

弱い男が金を武器にする

居眠りへ薬缶の蓋が笑ってる

馬鹿な親で秀才が育ちそう

本音を何時もぶっつけ合う二人

鳥取市 小林 由多香

先客も催促らしい語気荒い

蟻な子を迷うて俺の瞞上る

卓越という美辞にくすぐられ

鼻欠けた理由人形語らない

鳥取市 両川 洋々

税務署の目にもふしぎな金を貯め

運勢欄ある日離婚をけしかける
狂わない時計が僕を追い回し

正直な鏡をだます紅を引く

美祿市 安平次 弘道

切り札の出番呼吸をととのえる

許されぬ恋は女にリードされ

金で築いた虚像は金に崩される

シャボン玉割れ太陽の彩が散り

笠岡市 松本 忠三

騙すより騙される身をあきらめる

鯖を読む歳を鏡にみてもらい

親戚が他人に変わる落目なり

引換券十枚たまつてからのこと

倉敷市 小幡 里風

野仏へ祈るカラスが啼いている

頂上に挑めば妻が旗を振る

朝顔が食卓で咲く丸い膳

ライバルの名刺に汗のシミを見た

島根県 錦 織 文子

かたつむり秘めた闘志に触れぬまま

不足して人本来性にかえりかけ

気象台予報通りの暴れ梅雨

孫自慢受話器へ坐る今日も雨

松山市 谷 真風

ひとり歩いてひとり帰つて来てひとり

亡き妻の鏡で俺の顔を見る

なまじっか秘密知つてた不幸也

心の灯自分で点すほかはなし

竹原市 時 広 一 路

広い海小さな餌を見た不運

僕の金何に使うか聞く銀行

真実を喋ると風が強くなる

泥んこになれぬ子供が哀れとも

竹原市 森 井 菁 居

妻寡黙好きかと問えばウンと言つ

俳優の離婚が許せない妻で

海岸を歩くと少女に戻る妻

いさかいの逃げ場に妻は琴を持つ

守口市 羽 原 静 歩

ミキサーへ今日の迷いをかけてみる

三べんに分けて食べます五目飯

乱闘の中学生も世の流れ

踏絵踏む踏まねばならぬ雪しきり

大阪市 河 井 庸 佑

やんわりと断られてるを気が付かず

付き合つてぼつぼつ味の出る男

冷酷な仕打ち友情とわかりかけ

お互いに探り合つてゐる妥協点

大阪市 室 谷 徹 舟

死ぬまでが修行ですと慰める

優しさを欠いた強さの末路みる

前線が家にあるらし子が静か

勝算があつて負けるもおもてなし

和歌山市

松原寿子

逢いたい日の方程式ならすぐ解ける
もてる人の噂のこして風の芯
以心伝心その果てにある物語
ここからは夢を炎やして生きる女

鳥取県

川崎秋女

女燃えず真赤なカンナもう咲かぬ
落武者になるとも自説曲げられぬ
梅雨垂れて女が貯める涙つば
すりこ木の持てぬをおろかと思う日も

岡山市

時末一灯

退院日先ず雑踏へ身を投ず
足るを知る日の夕焼けが美しい
いつの間に見上げて叱る丈になり
流れ弾人の噂へ背をまるめ

大阪市

神田秀峰

この葉あるのをみれば同病者
省エネを叫ぶ政治家乗る外車
日本も知らずに海外旅行する
通勤へ老人バスも馳け抜ける

三重県

坪田冬花

揉め事を親が笑つて事がすみ
指の輪の子の小使いも桁違い
野良犬と飼いだもとは同じ親

親子とも知らずに軍鶏は命かけ

東大阪市

森下愛論

ずけずけと云える相手とビヤホール
退屈はペランダにいて甲羅干し
ニラメツコあつさり孫に敗けてやり
七夕に郷愁がある天瓜粉

下関市

国弘半休門

裁判官君も人の子人の味
善人も将棋をさせば負けていず
背のびしてとどいた所見つけられ
多数決大正生れを読んでおく

大阪市

江城修史

今日生きた汗は明日をうたがわず
振り向くな生きねばならぬ明日がある
余生とは私に遠い虹の橋
雑踏へ尖る心を置いてくる

奈良市

森田カズエ

家裁訪う夫婦の書いたメロドラマ
年金でのんびりなどは夢の夢
祭壇にスイッチだけの灯が明い
偶然の一致とおもう雨女

堺市

高橋千万子

無駄いく日思い過ぎしのナンセンス
こうよんで欲しいと孫の内祝
男性よ昔の威厳夢枕

力にはなれない話の座を外す

八尾市

飯田悦郎

耳鳴りが止まず手紙を焼き捨てる
和解には相手をじつと聞いてやる
善人は涙に弱いだけでない
出し惜みしない情けを持っている

米子市

小西雄々

台本はできても展開せぬドラマ
点と線つなげぬままに恋おわる
老人が増えては困ると言いたそう
幸運の流れに乗れず定年期

橿原市

岩井本蔭棒

加害者の人権ばかり大事がり
露地裏の赤い鳥居に睨まれる
わが畑で獲れる頃には飽いている
さて貰う時はごたくく保険金

倉敷市

藤井春日

束の間の命と知らず花の四季
その果てを慕情断ち切る旅に出る
ペレー帽冠れば親爺詩人めき
母の愛心の鎖を解いてやり

鳥取県

林露杖

紫陽花の彩の遍歴みどりから
花合歓の狂女の睫に似て虚し
熱帯夜田草が匂う手の不憫

一枝剪る妬心断ち切る花鉈

守口市

野呂右近

引退に悔なし静かなたはずまい
御機嫌の悪い日 蠅の厄日も
手に掛けた胡瓜裏切るよう曲り
見舞客濃い口紅はいただけぬ

東大阪市

斉藤三十四

見学と云う会で酔うて来る
知つてますよと妻の薄笑い
重責に耐える覚悟と弁かるい
石焼の鮎は川の名で呼ばれ

大阪市

横地雅風

その努力知らず健康羨まれ
脅しの蟹の鉈と気がつかず
横着になつたら案外世が送れ
相談に乗るけど財布は開かない

和歌山市

内芝登志代

生きて来た歴史大事に明日へ生き
暑い日に心の底まで冷える記事
手おくれと知りつつ聞き入る美顔術
いい汗をかけばいい知恵湧いてくる

松原市

北野久子

金の出る話気だるうなってくる
針を持つ女へ夫は惚れやすい
したいことしてる夫はよう眠り

終りまでじつと聴かないから嫌い

鳥取県

清水 一保

万場の拍手の中の敵を撰る

札束へ霊長の目が燃える

口で云う事の出来ない名刺です

戦いと云う字が憎い印刷機

西宮市

野呂 鶴汀

団体の善男善女よく食べる

とり込んでゐるとは夫婦喧嘩なり

俺が去る事を喜ぶ握手にて

舞台裏客を小馬鹿にした台詞

寝屋川市

柴田 英壬子

潮どきを外すと梅干しにならぬ

ゴールまで女心はむちを持ち

これからは主婦になり切る時間割り

ゆるぎない存在カナの離職票

岸和田市

古野 ひで

旅の宿女中も同じ国訛り

花あやめ亡母の形見の帯の柄

人形もケースの中で老いてゆく

雨やどり他人の秘密知り候

岸和田市

島崎 富志子

親の顔知らぬインコにしたわれる

欲を言えばと欲の深い事ばかり

いそいそと夫娘と出かける日

花しようぶ三日の命に燃えつきる

岸和田市

原 さよ子

お世辞とは知っても弾む着物着る

七夕の短冊孫の夢をのせ

バリウムを飲むのが恐く日を延ばす

左手の怪我慰めれば左利き

岸和田市

清野 こう

親切が裏目うら目と出る不運

ゆでられて貫禄の出る蛸の顔

失意から奮い立たせる子の寝顔

あいさつを交わして思い出せぬ顔

大東市

土岐 トク子

御中元が行ったり来たりする人情

哀しみの日はこの一頁黙示録

寡婦三年炎の様に火の様に

ひまわりが車窓へつづく想夫恋

和歌山市

福本 英子

死ぬことを忘れた老母の仏顔

夏蟬が聞こえるまでの城の跡

子報官に恨まれる覚えなければど

雨の日の不運をかこつて卵

三重県

川上 溪水

貫禄と思うしかない皮下脂肪

マダムから女房に戻るしまい風呂

ローン追うローンが生きがいとも知れず

どうしても借りるつもの美辞麗句

富田林市

中村 優

転落を伏せて読経の声激し

真面目すぎ一人残った旅の宿

外孫に手土産の分だけ泊らされ

障害年モデルにされる車椅子

神戸市

仲 どんたく

夏祭り日本の浴衣の夜を染める

整形で男の履歴書きかえる

この道はいつか来た道右の道

青春を屈折させて排気音

京都市

山 本 桐 下

好きだから折ってあげたいだまし舟

指折って明日は返事の来そうな日

世話好きの夫婦で人生泣き笑い

リヤカーと歩く先祖の土踏んで

東大阪市

崎 山 美 子

安泰でネズミのこわい猫が出来

追いつめてみればむなしさだけ残り

先生の手真似のうまい落ちこぼれ

ブームにはうとい女の手内職

今治市

越 智 一 水

お風呂屋で隣の嫁が洗ろてくれ

タンポポが飛んでる幸せ運んでる

くちなしの匂いにつられ立話

旅先で見た夕虹晴れてくれ

大阪市 藤田 頂留子

杭 全 祭

だんじりの九台共に亡兄の声

だんじりについて行きたい車いす

市場かごハモから鰻へ夏本番

喉元をすぎれば汗になる麦茶

島根県

梶 みどり

くちなしの匂う垣根に歩をゆるめ

母形見幾年経ても温み抱く

ラムネ玉人の心をもてあそぶ

和やかな笑い福耳をもつ姑嫁

島根県

木 村 はじめ

衣食住足りて心に足らぬもの

歳月の重さ素直な老夫婦

風に舞う落葉にも似て騒ぐだけ

犬連れて思わぬ近い道を知り

東大阪市

奥 山 弥山人

平穏な眠り余生の有難さ

すい物に惚れた老舗に恥じぬ味

けつまづく石に不調を教えられ

盆石のそれぞれ里の詩語る

青森県

五十嵐 操 史

冷害に不銘柄米買わされる

我が子には何にも言わぬ母の胸

我武者羅は馬鹿正直と讃えられ
占師金運の壺矢鱈賞め

玉野市 小谷仙山

好き嫌い言うて一人子落ちこぼれ
雨隣り琴とピアノのはさみうち
なんくせを付けて約束反古にする
人間不信猫には猫の掟有る

大阪市 黒田真砂

わだかまり消して仰いだ流れ星
火の鳥になって飛び度し夢の国
水中花彼の素顔を見てしまふ
イヤリングに聞かしてならぬ今日のうそ

鳥取県 金川満春

今日も無事ノルマを終えた缶ビール
やる事は総て果した余生の日
人妻の好意は好意だけしておく
石橋を叩く男で夢は見ず

鳥取市 岸本無人

卓上の乱れ直して叱られる
夢だけで騒ぐ乳房がうらめしい
如露持てば隣の花好き顔を出し
貿易の黒字で総理顔を売り

島根県 大野酔夢

決断をせまる男の交差点
年金で二人寝て起き二人食べ

百円が今も生きてる募金箱
打ち消して打ち消して女待ちつけ

姫路市 植村客遊子

ナイターは勝ってるビール追加する
車椅子ばかりが来たポートピア
菊の苗貰うて鉢も土も買い
日の丸の旗で飾ったレセプション

貝塚市 行天千代

二十五度春の暦を塗り変える
紫陽花のお洒落何度も色直し
仮縫いへ出て来たお腹何としよう
夏休みの旅行五月予約する

大阪市 欄蘭

ポツクリ寺寺の本当の名を知らず
超満員美人の横で目をつむり
たまに出た旅へ疲れと靴ずれと
核の傘相合傘で行く怖さ

高知県 松岡三吉

洋皿のマナー通りは美味くなし
二人に誤算ではない倦怠期
憎めないお人指先から炎える
ひとり住む女は秋へ啞になる

米子市 石垣花子

窓際へ変る日ネジを巻き直し
皇室の歴史へ長寿の灯がともり

道連れに恵まれ今日の納め札
逃げのびたつもりで魚釣られてる

米子市 雑賀美世

似た顔が揃う老父の一周忌
亡父の手の匂いが残る杖の艶
良縁へ無理に揃えた娘の支度
満点のカバンが躍る一年生

米子市 菅井とも子

盛大な見送り左遷気がひける
外遊の時差へ体調狂い出し
秀才に育ち家計が狂い出し
同居して明治のポーズ崩れかけ

米子市 青戸田鶴

ガッツポーズして初サラリーの子は帰宅
子をいさめるペンに思案の夜が更ける
全盛を過ぎれば風も向きをかせ
民族の折り境界線に立ち

米子市 桑原伊都

山の友情ザイルで固く結ばれる
ボランティア愛の応援かけつける
約束をしてからの荷が重くなり
来ぬ人へ伝言板もしびれ切れ

米子市 政岡日枝子

少年Aまだ出直せる歯の白さ
先輩を越す時心の夜叉うずく

点と線橋を渡れば愛がきれ
点と線男と女の燃えた跡

出雲市 園山多賀子

外される廻り疲れた独楽の私語
耐えること馴れて女の数え歌
角一つ曲れば噂も尾鰭つき
洗濯が好きな女で陽を拝む

出雲市 石倉芙佐子

吹き抜けた風は五十の坂を越え
落日はひとりの女を朱に染め
また元の孤独になった秋の海
好きな人に注ぐ杯はつきこぼし

高知県 赤川菊野

脇役が主役となった不仕合せ
女一人甘えてならぬ灯を守る
寡婦と云う自由な座にもある鎖
ねじまげたサツキの悲鳴聞えるか

大田市 藤田軒太楼

古都の旅暫し茶席の人となり
熟年の風格浮沈に耐えた髭
吊り橋にかかれば女 女をとり戻し
綾瀬市

大山と金

二割掛け二割引いての少し損
退職のしばし釣など昼寝など
一歩ずつ一歩ずつともしかと歩む

宇部市

平田実男

歛握る手をホステスへ出しそびれ

こそばがる妻へ残っていた若さ

いっこうに泳ぐ気配のないビキニ

寢屋川市

宮尾 あいき

涼風を招くと蚊までつれて来る

我が家一步出ると独身になる男

クーラーにマネキン人形の肌が冷え

大阪市

西川 善紫

明日は明日と懷手で気にしてず

雑兵の起す渦ならたかが知れ

男が男に惚れて犬馬の労

東大阪市

竹中 綾珠

六人部屋気の合う人合わぬ人

よくしゃべる病人しゃべらぬ病人同居

石仏に似た病人を持てあます

諫早市

原田 明春

本当のボーナス女房の手から受け

校歌とはほど遠くなる山と川

昆虫採集どこのデパートへ行つたやら

岡山市

川端 柳子

つまづいて人の心がみえてくる

はずむマリ持ち夫々の朝を出る

極楽という手があつてする昼ね

兵庫県

大江 秋月

連休は子の為にある若夫婦

夕立が待ち受けていたポートピア

樹の陰が少しは欲しいポートピア

姫路市

大原 葉香

松の緑四季の変化にへつらわす

ブルの音山彦となる開拓地

セーラー服笑いころげて通りすぎ

岸和田市

福島 せつ子

浴衣着ると孫が花火を持ってくる

花菖蒲みごとに咲いて持つ絵筆

肖像画の父も今は慈悲の顔

仙台市

川村 映輝

停年退職妻はノイローゼ気味となり

粗品とはあるが期待をもつて開け

グイヤ哀れ流浪の旅から脱けられず

倉吉市

渡辺 菩句

人の死を聞いた日の鳥なぜ鳴くの

てのひらが空港天道虫とばす

死が近いのか苔の花みて飽かず

島根県

大森 孝華

田満へ熟年とやらの物忘れ

駈け足でゆきたい日もある里帰り

本心へ別の握手の手が痛い

神戸市

山口 美穂

夾竹桃が小さな秘密知っている

はめられて本当のわたしを見失う
ポーカーフェイスたくらみのあるハンドルで

大阪市 北 勝 美

停電に文化の夜はサウナなみ

生真面目は女の期待にそいかねる

わかつててもそれが出来ぬも性分か

松江市 恒 松 町 紅

チャンネルへ夫権が少し顔を出し

バス停で退職以来のママに逢い

ご近所へ孫の自慢で老いの幸

松江市 竹 内 寿 美

逢えぬ日の焦り不快指数だけ上り

待ちかねた声で飛び出す里の母

寝転んで空の高さが恋しい日

出雲市 板 垣 夢 酔

鍋底を見せられて女もう逢わず

結論を急ぐ男よ秋の風

いら立ちは厨の音まで気に入らず

岡山市 荻 野 鯨 虎 狼

午前様孫の名前で戸をたたき

老婆の旅のプランへ雨の音

あすがあるあさつてがある葉呑む

岡山市 井 上 柳 五 郎

もの言わぬ父が会社で一言居士

余生へのプラン檜山は外しとく

寝溜めして戦友会へ父は行き

岡山県 岩 道 博 友

長靴に砂が入って引くびっこ

廃線と隣接稲田にスローガン

ナイトーの観戦妻も若がえり

兵庫県 藤 後 実 男

大胆な水着で泳がぬサングラス

流れ星子がない夫婦の願いごと

参観日母のおしやれに子が迷い

松江市 梅 本 登 美 也

水ぎわで女がさつと身をかわし

その艶がとてほしいさくらんぼ

正直な人の財布がふくれない

河内長野市

しわくちなや笑顔で孫と初対面

無欲には黙って心が頭下げ

マイカーを娘にとられ庭いじり

枚方市 稲 葉 星 斗

祭笛近しあなたの浴衣縫う

連休は男冥利の釣りの旅

旅人に名残りを惜しむ石仏

羽咋市 三 宅 ろ 亭

老い隠す変な技法は使うまい

無人駅近路いくつかできてきた

道路愛護道行くパラソルで弾み

島根県 山根峰雪

置き葉案外な程飲んでおり
会長を立てて幹事は縁の下
不本意であるに流れについて行く

出雲市 吉岡きみえ

パチンコにうさ晴らすとはかるい罪
涙つば枯らして女に意地がある
職のない男にふたつの手のやり場

岡山県 直原七面山

口先で飾る過去
上役も使いよう

浜田 久米雄

二級酒の酔いでこの世をまぎらわせ
すがりつく世ではないから手を振って
まだ先があるから酒を取り寄せる
竹いくら踏んでも青春にはならず
保険金満期生きてるうちに来る

尼緑之助

水を着て女が流す海の唄
盆近しどこでうろうろしてるやら
寡婦の朝犬と遠慮のない対話
行革の行方はエゴに取りまかれ
夕焼や水燃え切らぬ松江城

若本多久志

老いの眼に枯山水がわかりかけ
かたつむりローンの責め苦わかるまい

厄日とは神も仏もおっしやらず
老母の斬祈る思いをこめて聞き
叛逆のひまわり一本向うむき

本田恵二郎

小蟹が泡を吹いてる負けている
ふと亡母を思い出させた濡れ燕
軽量を技の重さでカバーする
気まぐれな風が花粉を戸惑わせ
ほどほどの腰の低さが親しまれ

正本水客

引き抜いた草に小雨が降り続く
栗まんじゅうの小さな栗をさぐり当て
長身の男に火の粉降りかかる
輪にはいる心算りで意見しまい込む
真直ぐな背中に真相見詰められ

川村好郎

ほほ笑みのわけ拡大鏡に写らない
馬耳東風さわやかに老いたくて
老いの足後押す風も吹いてくれ
離職してみても身軽さと空しさと
決断の男にリハーサルはない

川柳 太平記 (40)

浮世絵の終焉と漫画の登場

東 野 太 八

明治四年初登場した横浜居留のC・ワグマンの手による「ジャパンボンチ」は、軽妙、洒脱、風刺、滑稽の筆致で、庶民の嗜好に投じ、大喝采を浴びた。ために明治期の浮世絵の第一人者芳年と並称される小林清親は、ボンチ絵にならう錦絵漫画を手がけ、江戸時代を風靡した浮世絵に終止符をうつ。

漫画とは一体何か、化政期には北尾政演や葛飾北斎がすでにこの用語を用いていた。漫然と描く、そういう画想からだだが、もちろん現代の漫画のそれとは少々意味が異なる。

ともあれ漫画なる落書のルーツは、聖徳太子の建立した大和の法隆寺の屋根裏からスタートした。この法隆寺は六世紀の建立のあと火災で焼失、再建されたのが和銅元年（七〇

八）である。この七世紀の建立の法隆寺を数年前に補修した際、屋根裏の板や泥の上におびただしい落書が発見された。それらは男根や女陰やその交接図が主で僧侶の戯画もあった。どうせ往時の堂前師、石工連、屋根職の職人たちの仕業だろうが、いやしくも天下の仏塔に、この放埒な落書は古代も現代も人間の実性にいささかの隔りもないことが証明された。素晴らしい風刺ではないか。

やがて九世紀の藤原時代となり、陽の当る場所に登場するのが「信貴山縁起絵巻」や「伴大納言絵詞」である。つづいて鎌倉時代に入ると「地獄草紙」「餓鬼草紙」の地獄極楽の醜悪な惨酷さみなぎる仏画であった。地獄の鬼共が戯弄する亡者群との生態は、むしろユー

モアな人間性が躍如としている。

このあと十一世紀の源平期になると鳥羽僧正の「鳥獣戯画絵巻」の漫画の古代史を彩る最高傑作が現れる。この頃の医学者「おそく図」なる人体模写の絵から、巨大にしてダイナミックかつ迫力横溢の巨大なる男根・女陰の交接図が姿を現わし、これが後世の浮世絵の素地を作った「笑い絵」「まくら絵」「春画」の原典と化す。

浮世絵は町人の絵である。江戸時代、江戸庶民のための安易な絵画として描かれはじめた浮世絵は、約二百五十年の間、絢爛豪華にあるいは、庶民閨房の秘画の宴の彩宴としてもてはやされ、読本、黄表紙、洒落本の挿画・戯画で興味をあおりたてた。

浮世絵は菱川師宣（一六一八—一六九四）が、万治年間房州から江戸に出て、遊女や男性愛の秘戯に取材し、多彩な板木にのせたことにはじまった。浮世絵は天下泰平の庶民の消費生活のシンボルであった。かくて数多くの浮世絵師が輩出したが、ワイセツや風刺画に對し、享保七年幕府禁令が出されたが、衰微するところではなかった。ワイセツ画は、江戸期子女の婚礼の携帯品となり、また武家は鎧びつに殺傷除けの護符と重宝する始末。

浮世絵師はしかし挙って貧乏で、著名な一部の連中を除き、ほとんどが細民の卑しい版工の職人が多かった。清長も春信も広重も北斎も例外ではなく、禁令後はトク名で彩管を揮い、歌麿などは手鎖の懲罰さえつけた。役者絵の第一人者写楽などはその素性さえ知らず、海外では稀代の才匠ともてはやされた北斎は、貧窮の極、貧乏徳利を碎き、底部を水入れ、破片を絵皿にした程である。

さて、筆者の好きな浮世絵は、記せば際限がないのでこの辺で打ち切り、本題の漫画に移ることにする。

風刺・洒脱・滑稽に溢れた古代画の真の意味の漫画は、ポンチ絵を跳躍台に、近代漫画の命脈を打ち樹て、明治新政の表通りへと躍り出た。

C・ワグマンの手になる「ジャパンポンチ」の好評にあやかり、明治七年「絵新聞日本版」が仮名垣魯文によって発刊された。この絵雑誌の漫画は河鍋晩斎で、明治三年不忍の画会で、見るに堪えない風刺画を書き投獄されている奇人画家、別名狂斎、又は酒乱斎。

このあと例の「団々珍聞」が明治十年に登場する。専属漫画家は本多錦市郎で、バタ臭いペン画を駆使した。この雑誌は波乱興亡を

くり返えし、約三十年間も発行を継続したことは、庶民の人氣がいかようなものであったかがわかる。

明治二十六年に「二六新聞」が出た。ここに最後の浮世絵師小林清親が入社、錦絵風の漫画で活躍した。それから十年後の明治三十八年、世に知られた「東京パック」が発刊され、北沢楽天が登場する。発行の際は折しも日露戦争の最中で、連戦連勝に湧く日本国民のムードにうまく便乗して、楽天の名は一世を風靡した。この「東京パック」の人氣にあやかり、「東京ハッピー」「上等ポンチ」「大阪パック」等々が陸続と出現した。

問題の漫画の呼称だが、その歴史的人物が岡本一平である。明治三十五年「東京朝日新聞」に、彼はコマ絵スケッチを発表した。彼にすれば、世人の風俗スケッチのつもりが、そのユーモアに富んだ主観描写と、それに添えた短文の寸鉄味に、いつか世人が「漫画」との命名を与えた。

参考までに大正五年三越で開かれた第一回東京漫画会と称した催しに参加した漫画作家の顔ぶれをみてみよう。北沢楽天、岡本一平、池部釣、清水対岳坊、在田稠、下川四夫、小川治平、代田収一、岡田九郎、山田みのる。

第二回からは以上の外に近藤浩一郎、服部亮英、池田永治、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、田中比左良であった。この漫画会の催しによってポンチ絵なる名称は完全に消滅した。

さて、漫画と川柳のいわば「くされ縁」は素文川柳と称する谷脇素文の漫画の添えものとして、このあと大衆娯楽の人氣を集めることになるが、「団珍」や「パック」の乱立に併行して狂句は、それらの刊行の初期には、バレー句の川柳の体質をさらけ出して、趣好の限りをつくして、「団珍」や「パック」の滑稽雑誌の埋め草、添えものとして大衆のごきげんをとり結ぶ環境にあった。

― 間男の言い訳共和政といひ (団珍35号)

― 香水でちよっと開化を香わせる (同25号)

― 直言と民権兎角邪魔にされ

― さすが猫皮になつても膝にのり (驢尾団子)

― 西遊記悟空巡査を拝命し (我楽多珍報)

― ざつとこんな調子のしろものに、川柳はや

がて明治川柳の改革期に向うのである。

誹風柳多留廿六篇研究

(三丁)

石田晋一・南得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木黄・多田光

故岡田甫

42 看病のやうに寢釈迦の箔を置

石田晋「寢釈迦」は涅槃像のこと。涅槃像

とは、沙羅双樹のもと北枕西面右脇を下に身を横たう、多くの弟子や動物など一切有情の悲しみの中に涅槃せんとする姿の像である。

解は仏師が臥像に金箔をおいている姿がまるで、病人の看護をしているように見えるというのである。

いろ／＼に羅漢の仏師自をまげ

八六・22

多田「贊。箔をそつと置くさまが、病人の体をなでてやるようにも見える。

岡田「なでるのではなく、膏藥などを貼った

り、熱ためたり冷やしたり……であらう。

43 他領まで搬取上ける歌かるた

石田晋「歌かるたは百人一首のこと。川柳では嫁が上手とされている。「他領まで」と大げさに言ったところがみそ。

歌かるた人の丁場を嫁あらし

多田「礎稿に賛。

岡田「同。

二四・11甲

44 めりやすを黄色に染る練供養

石田晋「練供養」は、江戸では上野東叡山寛永寺が有名。「十月二日、その日取が二日

の定めであつて、御門主以下全山の院主が慈眼堂に総出仕し、法華八講、行動散華などの練供養が行なわれる。これを俗に「おねり」という。

しかし、めりやすと練供養が、どうにも結びつかない。

多田「私にも、はつきりしません。

岡田「《練れる》の語は、女子が遠路をする」と局部湿润となる意ですから、若い嫁が練供養で、股引を分泌液過多で汚した意と思つています。

45 黄金ンも借賃シのある夏と秋

石田晋「夏と秋」は、本句の場合山王祭と

神田祭をいう。この祭りに使う金屏風は、大方借り物であつた。

山王と神田でもみた金屏風 一七・一

多田 〓 賛。

金屏風嫁の自筆でかりにやり 二八・23
借りて来て店へ後光が二日さし

岡田 〓 同。 第一・38

46 張り立てのしやうじを破る色直し

石田晋 〓 「張り立ての障子」——結婚のため畳を入れ換えたりするのと同じく、障子も新しく張り換えたのである。

そんな状態の時、下女などが花嫁の姿をのぞきにくるのであろう。障子を破ってしまふよふな事もあつた。

南 〓 賛。こそこのぞくのは祝宴に参加出来ない連中。

かけぼし待ち女郎ハしかりに出

明四義 2

多田 〓 賛。

ちか／＼と見へて大工やた、みさし

一三・1

というように、嫁を迎えるための普請と共に張りかえた障子を破つてのぞくわけである。

岡田 〓 同。

47 出きらいといふ振袖ハ聲を取り

石田晋 〓 出嫌いといふ振袖——箱入娘をさす。醜女とまで考えるかどうかは未詳。親が非常に大切に、「あの娘は出嫌い」と隠しているのか、ひどい顔で見せないのか、どちらとも判断できない。

出きらいといふ振袖ハどた／＼し

二・11

南 〓 「出嫌い」の理由。箱入娘、醜貌その他肉体欠陥のもの、その他に性格的なもの（内気性）がある。

多田 〓 箱入娘でしょう。

岡田 〓 ボクは内向性と考えています。

48 欲クの無ひ形身手跡キが貰ひたい

石田晋 〓 形身分は普通、

なき／＼もよい方をとるかたみわけ

一七・44

わつ／＼と泣てかたみを持て行

二・12

かたみ分つらみつらみのはしめ也

拾三・16

などのように、金になるものを奪いあつもの

である。それが、手跡、故人の筆跡のみが貰いたいとは、なんと欲の無いことかというのである。

本多 〓 賛。

欲の無い記念手跡が貰ひたい

一五三・8

多田 〓 賛。

岡田 〓 同。

49 不断ン着へつめたく戻る御延ン引ン

石田晋 〓 花見の日、雨が降り、花見は延期。せっかくの晴着はしまつて、不断着姿にもどる、雨の冷たさと共に心も冷えるという意である。

くつきりとこしらえたのに御延引

第一・27

おしそうちにこし帯を解ク御延引 五・12

多田 〓 賛。

岡田 〓 同。

川柳塔柳箋

一冊 二百円

送料 二百四十円

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 56年 5月号
至 56年 8月号

◇路郎賞候補作品

(到着順)

若 本 多久志

橘 高 薫 風

伝説へ藤 真白う咲いて尼の寺 錦織 文子

正 本 水 客

紅少し濃目に引いて街は春

黒田 真砂

その日だけ書かぬ日記が抱く炎

八木 千代

とまり木で絆編み込む日の鼓動

松原 寿子

十指みな強い絆を知っている

内芝登志代

盃の底へ想いをみな沈め

工藤 甲吉

緋もうせん甘酒があり京の梅

高橋 操子

見つけたら仏の眉にある愁い

岩田 美代

亡母恋えば薄墨彩の花となる

岡村久志良

鉄錆のように父の老斑よ

西村 早苗

一合でねむる老父をいとおしむ

林 瑞枝

草萌えの日のロマンスを抱いて老い

有田とし江

花の下別れ話の人もいる

野田素身郎

武者飾る飢えも戦さも幻に

谷垣 史好

割勘のもつれにレジの無表情

河野 君子

昼の月へまっすぐに立つ鷺の首

高橋千万子

ソブラノが一人まじってお念仏

阿萬 萬的

別れたら女化粧をしはじめ

安藤寿美子

ソモサンと蠅が坐禅を試しに来

野呂 鶴汀

聴えない哀しみはなし花時計

西森 花村

立ち呑みでころして帰る腹の虫

柳原 静香

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

飯田 悦郎

十代の非行遠巻きにして騒ぎ

藤井 明朗

嬉しいことに米櫃の米が減る

福本 英子

風邪引きを酒やめさせたせいにする

原田 明春

列外を歩き認められようとする

田垣 方大

ぶきつちよな借り方だから貸してやる

野村太茂津

春雨の中で木蓮座禅組む

都倉 求芽

クリーニングにあれもこれもと出す女

谷垣 史好

いざベンを執ると言葉の貧しかり

山内 静水

海ゆかば潜水艦にぶつつかり

両川 洋々

別々に初老の夫婦バスを待ち

石垣 花子

単純な頭でピストルが撃てる

柴田英壬子

突然に向う岸から来る波紋

雑賀 美世

仏さんのようで相談にはならず

遠山 可住

昨日よりきれいな顔で目をさます

小野 克枝

両の手に触れる幸せだけは知る

堀江 正朗

自らを欺く酒に身を沈め

藤村 女

能面のゆらゆら薪の火に染まり

松川 杜的

コーヒーを飲むのに四面楚歌の位置

大原 葉香

川村 好郎

煽られやすき女ごころへ南かせ 河野 君子
座蒲団をそうかそうかと敷いてくれ

水粉 千翁

疵つけずつけられたくもない無口

若宮 武雄

カレンダー明日よ明日よと薄くなり

高橋 夕花

ガス自殺出前の鉢を置いたまま

黒川 紫香

虹の坂のばれば消える定めかも

梶 みどり

贈られて唯それだけのペンダント

福本 英子

満月へ疑心暗鬼がなおつり

谷垣 史好

盃は働きの指が好き

堀江 正朗

ひたむきな日はコトコト豆を煮る

小出 智子

やけくそで走る国鉄とも見える

岩井本 蔭樺

十代の非行遠巻きにして騒ぎ

藤井 明朗

巡る四季素直に巡るそれもよし

江城 修史

面影を辿る弥陀の眉あたり

八木 千代

西尾 栞

日本同じテレビ見る怖さ

浦野 和子

嬉しいことに米櫃の米が減る

福本 英子

何もする気がしない寝釈迦でござい

浮き沈み最後は沈んだまんま逝き

渡辺 菩句

本を借りただけで終わった好きな人

岩井本 蔭樺

さくら草恋知り初めた手で抱かれ

原 さよ子

免許証受けて歩行者邪魔になり

大道美乙女

春雨の中で木蓮座禪組む

川村 映輝

ベッドシーン妻泰然と編んでいる

都倉 求芽

適量を越えたいびきと妻は知り

田垣 方大

お姑へ笑い薬を考える

小西 雄々

一筋の枯野見飽きた仁王の眼

北野 久子

本好きと本が嫌いなあねいもと

辻 文平

錠剤を数え五月の空を見す

柳原 静香

グループに無口がひとりいる無気味

古野 ひで

たよりないのが一番ファイト燃やして

島崎富士子

城を見て俺はどこからつぶそっか

清水 健司

奥様によろしくと寡婦距離を置き

野呂 右近

◇川柳塔賞候補作品

黒川 紫香

爪丸く切って我が身をいとしとも

言い負けて母の強気へ安堵する

村上田 鶴子

自信ない顔が後列から覗く

松川 芳子

平凡な母を愛した父である

加藤 茶人

仲人が大阪弁でよう喋り

津山 刀水

そばにいてコーヒーを飲み終るまで

高杉 千歩

淋しくて波紋をつくる水たまり

稲葉 好子

再婚の話へころぶ毛糸玉

奥山美智子

燃え尽きるまで忠告は無駄のよう

松岡 三吉

草笛を吹くひとときは素直なり

本多 洋子

珍客へ目刺しの匂いまだ抜けず

満仲きく子

愚痴るときも楽しいことも母の墓

渡辺伊津志

かくれんぼ追えば鶏ついてくる

工藤 路子

大人への遮断機上げる父の顔

田中 叶

旅にいて妻は夫の茶碗買う

丹下 玉子

腕時計はずすが如き別れなり

西村美佐女

怠けものだが車はよく磨く

村上田 鶴子

大吉を引かせた神の無責任

三宅 亭

鉛一つ男は長い糸をつけ

中谷 利美

何故の旅か小さな渡り鳥

鈴木 可香

何思ったかそれっきり出てこない犬

松本 文子

ひたむきに生きて獣に異ならず

田中 叶

終点で風がごくろうさんと言う

矢野 佳雲

津山 刀水

56年度二賞発表会と

同人総会

日時 昭和56年10月4日(日)

午後一時開場

会場 なにわ会館―大阪市天王寺区石

ヶ辻町38―1(近鉄上本町六丁
目から歩三分)

電話 06・722・1441

▼同人総会は午後2時〜3時半

▼懇親宴は午後4時〜5時(会費三千
円) 同人以外の方も出席歓迎

▼二賞発表句会は午後5時50分から

おはなし

西尾 栗

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題 「直感」 高杉 鬼遊選

「幽」 野村 太茂津選

「返事」 黒川 紫香選

「女神」 川村 好郎選

席題 当日二題(各題三句以内)

会費 五百円

川柳塔社

笑い方少し違った義母と母

失礼をしますと妻が跨ぐなり

指一本折る一年が長かった

警官が来てから強くなる男

もう一度不幸がしたい母の墓

口だけの信心木魚もそんな音

野々口ゆう也

凸凹をならせば世間つまらない

坂部紀久子

高杉 鬼遊

日々好日 夫婦げんかもたまに

水仙を切ればあふれる水の色

旅行から帰ると鳴っている時計

死ぬときはみんな一人よ花吹雪

再婚の話へころぶ毛糸玉

そしてそしてと話し上手な野の仏

善人の中では眠れぬ紙幣の束

解く時を思えば結びようがあり

応接間バラ三本に隙がない

旅にいて妻は夫の茶碗買う

縁談は待つものとして嫁き遅れ

指一本折る一年が長かった

悲しみがあるので傘をふかくさす

花束を受けて今日から姑となる

焼けぐあい見に寄ってくる火事見舞

渡辺伊津志

松岡 三吉

片上 明水

田辺 哲寿

浜本久仁於

香 川 酔々

腕時計はさすがに如き別れなり

百年もたてばどうって事はない

大吉を引かせた神の無責任

道問うた人にまた逢う旅のこと

グムの葉をていねいに拭く風邪の昼

ふるさとで行方不明の俺に遭う

蕨 芹 年金夫婦の厨の灯

見本にはならぬが父を見ろと云う

駆け足で仏に会おう遍路バス

この街の機械の音を愛す父

裏見せぬ柱時計が信じられ

五月の陽金魚の死骸棄ててあり

じっとしていても十二時飯に

どんな聖書よりも母からきいたこと

口だけの信心木魚もそんな音

野々口ゆう也

市川 鱗魚

片上 明水

杉浦婦美子

西村美佐女

矢野 佳雲

田中 叶

松岡 三吉

津山 刀水

高杉 千歩

稲本 凡子

村上田鶴子

大野 武太

中谷 利美

浜本久仁於

吉田 口ゆう也

坂部紀久子

渡辺伊津志

松岡 三吉

片上 明水

杉浦婦美子

西村美佐女

矢野 佳雲

田中 叶

松岡 三吉

津山 刀水

高杉 千歩

稲本 凡子

村上田鶴子

大野 武太

中谷 利美

浜本久仁於

吉田 口ゆう也

坂部紀久子

渡辺伊津志

松岡 三吉

片上 明水

杉浦婦美子

西村美佐女

矢野 佳雲

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

濱野奇童

横向いて耳に逆う風をよけ

堀江正朗

価値観の多様化した現代社会での風評は、
本当に好き勝手なことである。横を向いてよ
けるのは、決して逃避ではない。静かな決意
である。

久し振りの友へ指輪は嵌めず会う

川口弘生

指輪に象徴される人物は、いろいろに想像
させられるが、それはともかくとして、久し
振りに逢う友に、何の飾りも捨てて、昔のま
まの姿、裸の姿で逢おうという懐古の気持ち
が温かく伝わってくる。指輪が適確に働いて
いると思う。

ためらいの顔にも開く自動ドア

林瑞枝

機械化されてゆく社会への諷刺が鋭い。人
間の感情とは別に、どんな処理して行く機
械の冷たさ。現代社会の欠陥を表象している

ようである。
上げ底の底をはたいて嫁がせる

山内静水

娘一人嫁がせることは、昔から大変な事と
されて来ているが、物質文明の中で年々華美
に走っていく現在、見栄も手伝って大変な事
である。しかし、苦しい家計を上げ底と詠ん
だところにユーモアがあり、両親の心情を歡
びと誇りに転化させて温かい感情が伝わって
くる。川柳の効用であらうか。

群衆の一人一人はお人好し

高杉鬼遊

青少年の非行が、大きな社会問題としてマ
スコミを賑わしているが、彼等とて一人一人
は本当にお人好しである。だからこそ集団の
中で同化されやすいのかも知れないが……。
子どもの社会も、大人の社会も全く同じ事の
ようである。

つぎなおすお茶へひとりの雨でよし

水粉千翁

静かである。達観した心境であり、句であ
る。

やつと間に合い余情のない別れ

高橋千万子

別れはドラマである。いろいろと脚色され
ることによって余情を生み、別れ後の絆と
繋ぐ。発車ベルすれすれに駆け込んで別れ、
これまたドラマである。

昼の月余つぼど暇なのが見つけ

月原宵明

高度成長の時代から低成長時代への移行、

「ゆとり」という言葉がやたらと耳につくこ
の頃だが、「ゆとり」は、なかなか持てそう
にない、機械に追いまわされる毎日である。

現代社会への諷刺である。

産声よ日の丸に風吹いている

小島蘭幸

産声に対する期待と喜びが、青空にひるが
える日の丸によって、適確に表現された佳句、
びつしりとレールをひいて子を殺し

中村ゆきを

子への期待感からしきつめられたレール。
甘やかされて育てられたひ弱な子ども達であ
るだけに、親の期待はより重くのしかかって
くる。下五が鋭い。

思春期の少女大人の罪を見る

飯田悦郎

人は地に溢れて惜しい人が逝き

江城修史

明けきれぬ街は汚れてなぞいない

時広一路



正本水客選

青森市
梅雨明けへ浴衣ののりをうれしがる
父がいて母がいた頃夢に見る

工藤 路子

P.T.Aきつい意見も吐いてくる
バカンスのプラン子と練る喫茶店
レモンテイ素的なひとと海を見る

竹原市
古田 鈍舟

心をすっからかんにする旅に出る
じっと見る金には縁のない手相
時を待つ朱子の哲学読みかえし
むし暑し夫婦けんかの種さがす
新茶入れて炎天の涼とする

高槻市
竹内 花代子

気がつけば世帯持つ娘にみな育ち
アルミ貨が路傍の雨にたたかれる
ビニールのスダレに好きな色が無い

みつ豆へ日傘をたたむ女連れ
花菖蒲あざみも競う色を持つ

尼崎市
奥山 美智子

今日を思い明日を思って水を研ぐ
エプロンのポケット愛がこぼれそ
花菖蒲活けて久しい人待つ
ひっそりと枇杷のなる木の長い堀
笹舟を流した川は地図にない

今治市
矢野 佳雲

買い言葉パンチの利いたのを探す
まっ先に噂を聞いた道祖神
口車まだ泥舟と気づかせず
お茶一つよばれ賛成して戻り
あの場合僕でも開ける玉手箱

大阪市
橋元 美恵

姑の知恵借りて大事な日が終る

恙ない暮し私の彩薄め

決心がにぶるので公衆電話から
きれいきれいに辛い日の髪洗う

エレベーター敵も警戒してるよう

岐阜市 市川 鱈 魚

子が継がぬ職で外せぬ鬼の面
折り返し点から丸い寡婦になる

恋いくつ齡重ねても花をよる

低い腰母に程よき人ばかり

突き当る一語 他人の壁になる

唐津市 浜 本 久仁 於

母の背に触れてみたくて墓碑洗う

母さんに笑くぼがあつた古写真

僕がいて君がいて教室の窓明し

花束を魔の海待ってたようにのみ

夏草で終る雑草満ち足りる

豊中市 満 仲 きく子

酔うている顔へ相槌打っておく

情熱をなくした男にある焦り

枕トントンたたいてたいて眠られず

否定とも肯定ともとれる沈黙で

菓子たんと買うて怒りに女耐え

岡山県 池 田 半 仙

梅雨の霧 毎日かかる向い山

株分けの紫陽花別な彩で咲き

三面鏡とは話さぬ嫁の忙しさ
婚期過ぎ生活力を持つ女

モデル地区と云う肩書に縛られる

名古屋市 鈴 木 可 香

少女仲間の相談みつ豆屋できまる

一と息に告げる少女に嘘がない

有るとこへ儲かる話持つてくる

親切な老人辻まで出て教え

八尾市 高 杉 千 歩

知るべなき ここが故里墓洗う

ふり向けばけし粒ほどの苦が笑う

穢土浄土 一筋に生きる道なれば

お祭りへ廻って銭湯遠くなる

寝屋川市 稲 葉 好 子

紅さして花活ける心に嘘はない

一枚の葉書が生んだ大きな輪

他人の子を叱ると親がとんで来る

通り雨しようぶの花びら活気づき

尼崎市 丹 下 玉 子

子との距離短いレール敷いておく

優しさが欲しくて娘の家ノックする

愛乾く女だまって時計見る

忘れ得ぬ影を鏡の奥にみる

大洲市 横 田 放 人

バーゲンをあさりしばらく若返る

折々に小患いして母達者

雨もよし晴れてもよしの花菖蒲

悩む子といっしょに花の種をまく

兵庫県

奥野テル

少女等は木の葉の揺れにも笑い合い

上げ下し夜具に老化を思う日々

脱ぎ捨ての足袋に老母のつかれ見る

粉ぬか雨うなずく様にあやめ揺れ

松原市

本多洋子

変化球受ける構えは出来ている

露はみな宝石となるかきつばた

バイトの女 髪なびかせて夏を行く

白球へバレーの子等の声はしく

島根県

藤原鈴江

酒ちびりちびりと酔余の雲動く

茶を点てて茶器の中なる亡母という

姉妹で着たりぬいだりシヨーに似る

柱時計ある時黙っていたくなり

松原市

佐藤藤子

受話器置いた余韻に母がいる

疲れたと言いいい女よく笑う

無口だと思ってた子に意見され

ぼんやりと金魚見ている昼下り

鳥取市

武田帆雀

催足をしてはどうかと言う女房

絶妙の冗談残して逃られる

高級車一台職安の駐車場

蟻の穴突ついて主流から外れ

兵庫県

中田白李

毎日を生れかわった気で起きる

もう読まぬ古本に未練捨てきれず

右向いて左を向くのに税が要る

孫達へ電話どの子もみんな留守

弘前市

田中叶

但し書 読まず役所へ来た男

ネオン街明けてしらじらゴミがあり

笑わない婦警 炎天の駐車違反

雨の古都おんなは細き道に入る

竹原市

古田比呂子

夕方がなにやら私をせきたてる

悲しみの数だけ拾う貝のから

打ち水に亡母の声が聞こえそう

朝顔の咲く路地裏の風が好き

名古屋

越村枯梢

梅干しを漬け終え母に夏がくる

冷蔵庫足で閉めとく共稼ぎ

金のない男と知れた宵の街

暫くは黙っていたようガムテープ

旭川市

朝倉大柏

しくじった耳へ誰かの拍手聞く

同じ言葉また繰返す負けぎらい
議論していれば民主主義とも思い
UFOを見た嘘ならば聞いてやる

尾鷲市

渡 辺 伊津志

子と同じ動作で犬が歩き出し
嘘つかぬ癖を女房はがゆがり
合掌を下から覗くつぶらな瞳
過ぎて行く時を嵐の中で待ち

米子市

足 立 由美子

行詰りの悩みを山へ捨てに行く
バーゲンの山に素顔を女出す
呼ぶ声に返事もしない福の神
児の注意受けて目覚めたシャレ心

松江市

豊 田 巡 歩

赤い灯の女はあかんべが上手
本当の愛の手は少し冷たい
犬までが腰が曲ると吠えかかる
びしょ濡れになると日銭が光り出す

岡山市

原 田 凡太郎

謝りに行くと仮面を貸してくれ
草刈機 容赦はしない音で刈り
僕ひとり残して湯宿寝てしまひ
叱らない父がこの頃怖くなり

親よりも程度が高い子の書棚

尼崎市

中 谷 利 美

酔うほどに話し相手がほしい酒
子と孫の外に話題のない夫婦
腰据えて飲めば太刀打ち出来ぬ嫁

大阪市

日 阪 秋 子

野仏に一と浴びさせる雨が降り
上の空で聞いて合槌打ち直し
雑草とわかつたところで引き抜かれ
伸び切ってパーマ素直な毛に戻り

大阪市

西 村 芙佐女

恋人の時計とあわせた未来持つ
生きざまの見える雷雨が通り過ぎ
足裏の冷たい夏で発心し
平泳ぎだけで期待からはずれ

熊本市

有 働 芳 仙

社運など関係のない廻り椅子
かけ橋になつてピエロの役が済み
焦点をいくつも持っている女

高知県

山 崎 広 風

美男美女別れ話のない不思議
米食べて少し政府の味方する
妻の敷くレールを走る日曜日
天牛のおっさんという懐かしさ

大阪市

堀 口 欣 一

日本語のかく麗しき山家集
食通のやはり胃ガンという噂

鳥取県 羽津川 公 乃

気が向けば男とことん掃除をし
道連れが一駅ごとに降りて行き
買物のお供に自動ドア開く

大阪市 鍛 原 千 里

美容院出てから翔んでみたくなり
存在を示す頑固さにくめない
さわやかな別れにくちなし香ってる

鳥取県 加 藤 茶 人

踏ん切りがつかぬヤジロペー揺れたまま
病窓のハエ一匹を見て飽きず
四面楚歌 母の言葉にある救い

泉佐野市 大 工 静 子

魚釣りの伴所在なし栗をむく
芝生刈り蜥蜴が睨む尾が切れて
旧友もほとんど寡婦で集いよる

大阪市 平 井 露 芳

スーパ―慣れして値切るのが下手になり
靴下の右も左も区別せず
俄雨あつと云う間に蟻が消え

唐津市 田 口 虹 汀

血のように紅い絵具の筆洗う
僕の顔たてて朝顔一つ咲き
ほろ酔いの舌にすこしの隙もない

大阪市 朝 倉 利 義

雨降って固まる仲なら案じない
パチンコが趣味とも云えず無趣味です
ボーナスが無事なら許す御前様

鳥取市 森 田 熊 生

完敗と思いたくない策を練る
一人だけ不幸背負うた顔でいる
正直に話してからはよく笑い

鳥根県 松 本 文 子

朝顔のつる一すじの慕情かな
トンビでもいい空駆ける親子なら
散る時に花は何かをつぶやいた

大阪市 清 水 康 恵

重荷なら夫婦で少し軽くする
停留所まだ眠そうな顔もいる
一盛のレモンを買ってバックする

大阪市 津 山 刀 水

喝采のない職場で終る父
毛ばかりが抜けて小鳥のものおもい
風鈴をなくした風の思いやり

熊本市 高 野 宵 草

連休を寝ころぶだけの貧しさよ
ステレオにボレロ流れていて欠伸
若葉の重みに潰されそうに天守閣

鳥根県 東 原 福 子

重患を看取る夜更けの星光る

病室の牛乳瓶に匂う百合

病棟をまたいで湧き出る入道雲

尼崎市 中辻千子

母も嬉しい父の日のプレゼント

梅漬けて去年が昨日の如く見え

どの星もまともに生きよとウインクス

島根県 松本はるみ

心なくおもねる人に引きずられ

新緑を吹くとも見せず風が過ぎ

ぎよつとする色でサボテン一夜咲く

堺市 田辺哲寿

確かめる為に遅れて行ってみる

七人の敵に私も教えられ

鈴が鳴りまた神様が呼び出され

倉吉市 今村夕路

土用干し軍隊手帳出して見る

子育てに洗濯物が日毎あり

看護婦はどこか薬の匂いする

八尾市 宮崎シマ子

ストレスを梅雨の晴れ間に干している

口答えしたいのを押え花を分け

子供だなあ向いの子犬も菓子が好き

今治市 新居田胡頼子

真ん中の位置幸せなヤジロベ

伝統芸守る情熱過疎に燃え

言い勝った妻が他人のように見え

青森県 波ただお

誰彼と声かけてみる嬉しい日

ご無沙汰を暑中見舞につけ加え

決心がついて急いでタバコ消す

岡山市 串田句味地

譲るものないが辛抱を子へつなぐ

要らぬ米作る真夏の稗を抜く

灼熱の日で睡蓮に瞳を凝らし

島根県 星野侑正

善人の顔して弥陀の前に座し

叱ったりするなと母が娘を叱り

横なぐりの雨にデンデン虫しがみつ

大阪市 山本炬齊

梅雨空にぼたん大輪鮮やかに

時期来れば花は自然に咲いてくる

乗り遅れた始発へ欠伸ばかり出る

西条市 片山明水

くす篋が一つ子の無い夫婦箸

小さい恩返せぬままに通勤車

傘で眼を避ける女としての罪

榎原市 西本保夫

あっさりこの場は悪者になる勇氣

賞罰が無いのは逆にはめられず

ボクの過去知ってる汚れた安全帽

修学院の緑 承応の頃の色

羽曳野市

佐野白水

妻の留守独り暮しのりハ―サル

堪忍袋の紐を他人が切つて去に

島根県

岩佐富子

針を持つ祖母のたしかな糸切り齒

茶に呼ばれスタイルの中で聞くうわさ

それぞれの個性で育つ孫三人

兵庫県

野々口 ゆう也

七十に雑音聞かせて呆けささず

老夫婦温もち合い愚痴少し

堂々と女ひとりを表札に

大阪市

野田君枝

ほどの距離で見守る娘の暮し

空カンを拾えば公園広くなり

ボーナスをローンで割るとゼロになり

和歌山市

細川稚代

適当にちらかっているあたたかさ

惜しい人亡くしましたと票をよみ

故里の夜空でさがす父母の星

大和高田市

岸本豊平次

鯉のぼり遠くで軍靴の響き聞く

重い手で化粧する日もある女

見た通り絵に描けばよいと師は教え

尾道市

八木秀水

梅漬ける現代風に塩ひかえ

妻病めば今日もまな板干したまま

右往左往しないで癌なら死なせてよ

唐津市

山下勝一

田植機に農政批判の音高く

ボーナスもやがて夏痩せ夏の陣

通り魔がつぎつき壊すシャボン玉

今治市

八塚三五島

なつメロに揺られ観光バス楽し

午後六時さてこれからは旅の宿

先頭も二回目という頼りなさ

大阪市

稲本凡子

節約の度合が違ふ貧富の差

追憶をたどれば外は粉雪舞う

余生という現実が身構える

尼崎市

矢萩貞子

秀句書き使い始めにする句帖

店先に裸のマネキン立っている

浜寺の海辺の砂がなつかしい

羽曳野市

麻野幽玄

家中の灯り花火の為に消す

趣味のない夫の老後など思ふ

唐津市

桑原掬治

お喋りのいんこ夫婦はキスが好き

ねじの無い電気時計のまぬけ顔

夾竹桃咲いて学生昼帰る

少しずつ何やかやして捗るよ

防衛費 喧嘩仕度と云う予算

肯定も否定もしない距離でいる

熟年の名に恥しい無為の過去

大ジョッキ水ならあれだけ飲まれまい

聞いてすぐ忘れる歳を笑い合い

十代の孫の機嫌へさからわず

旅の道連れに妻は撰ばない

男対男どちらも勝たしてやりたいが

口数の多い女で風を呼ぶ

会長にまつり手軽く使われる

なんと言うことなく恋しふるさとは

そのまま来いよと弥陀の呼ぶお声

五体満足で何も出来ぬ身を恥じる

親の目と違い娘をほめて呉れ

神戸市 久保 禎 三

大阪市 大野 武 太

大阪市 杉 本 智慧子

岸和田市 吉 水 照 江

鳥取県 和 井 観 洋

米子市 寺 沢 みど里

東大阪府 三 宅 哲 夫

新潟県 高 野 不 二

東子市 小 山 悠 仙

ライバルへ見せるプランは別に持ち
水軍の血を引く浜の砦跡

孫の世話出来て無難な姑の日々
子の別居 意地張り捨てて夫婦いる

三重丸 女の応援透けて見え
遅刻して名士のバラが悪びれず

今日暮れて小銭入れている貯金箱
合格はビリだが図太く付いて行く

咳払いそれも男の価値のうち
ボス猿のくしゃみ群猿遠くいる

餌を待つ蜘蛛の巣眺めて無為無策
借りもなく貸しもまたなくめし美味し

脱水機にかけたいほどに嫁肥り
ハネムーンたっぷりドルに替えて発ち

名将も時にはやけ酒飲んでいた
五十歳ようやく頭下げる癖

ローカル線街の匂いも乗せて着き

高槻市 田 崎 あき子

米子市 野 坂 な み

寝屋川市 立 床 晴 風

唐津市 久 保 正 敏

愛知県 国 分 甲子郎

交野市 山 本 テルミ

八尾市 山 下 みつる

米子市 田 中 亜 弥

しまい風呂 母も音痴を恥じらわぬ

三重県

森脇和子

定年へ戦友あり遠方より来る
仲人へとんば帰りでお中元

泉佐野市

真崎浪速子

格言が今日の一日うなすかせ
聞く方が内緒ばなしに氣を使い

唐津市

木塚素石

まだ持てぬおもちゃ握らす手を添える
パパ似だと云うてと客に頼んどく

神戸市

本間良子

意見することもなくなり独り酌む
枝豆を孫にもがせた祇園さん

和歌山市

坂部紀久子

久しぶりの旅に老母のはしやぎすぎ
婦人服売場で男あわれなり

大阪市

岡田ふみ

どことなく女の会話にのぞく見栄
そのままの自分を出せぬ苦労性

兵庫県

山根左春

乗り込めば始発の客のねむい顔
大人ならそれで良いのか子供の眼

大阪市

山田松太郎

何事もなく それぞれの始発駅
特別と云う名に弱い婦人たち

青森県

岩淵一星

商売にだっこしながら国語る
大学生ばかり雇って社をつぶす

島根県

岩田三和

女房をコピーにして娘が育つ
妹を偵察に來た亡母の友

大阪市

白石潔

亡父恋し色褪せた日記読み返す
銭湯で顔だけの馴染と話し込む

八戸市

島田昭治

客が来て夫婦げんかは幕にする
旅なれて土産は買わぬことにする

唐津市

仁部四郎

取り壊す家を名残りと孫に見せ
特別にほめるとこなし我が妻よ

兵庫県

山崎忠夫

観光地來る人去る人暮らす人
終着で帰り始発で出る暮し

鳴門市

八木芳水

観戦の特別席でやじられず
しよぼくれず色あざやかに咲く野草

兵庫県

藤原捷一

金運に逢えずコツコツ貯める仕儀
貰う手とやる手上手に使い分け

高知県

山下登舟

片ちびの下駄を干してゐる梅雨晴れ間
うつ伏せに砂に寝てみる大乳房

唐津市

浜本義美

セーラー服 家では適齡期の女

梅雨空の煙重そう斜に向き

鳥取県

石井雅水

単身の赴任も男の試金石

中古車も同んなじ程の税払う

兵庫県

丹増貞子

横道へそれずに巢立つ孫に夢

買物のかご手に提げて嫁の留守

大阪府

林ひろ子

物臭を梅雨のせいにして昼寝

マニキュアの赤が太陽にまぶし過ぎ

奈良県

宮川古都路

先達は祭天狗の高い鼻

高速路サーピスエリアで観る景色

浜田市

佐々木裕

共稼ぎ姑のハタキに励まされ

岡山県

松本元江

水濁る川のおたけび今日も聞く

河内長野市

糸谷春草

紅白の餅 大関の内祝

山口県

高崎喜一

濡れ髪に海女の素顔のふくよかさ

故里をぬらして行くよ通り雨

島根県

堀江百代

腕相撲 息子に負ける年となる

東大阪府

坂本喜洗

箸使うことも学校教えてる

和泉市

岡井やすお

花屑が媚びていとしくなる筈

東広島市

坪島美津江

うみなり川柳会

鳥取市相生町三丁目二〇四

残暑お見舞い申しあげます

大塚豊生	中森葉士人
北野天人	小林由多香
森田熊生	小川源太夫
両川洋々	土肥希満子
加藤貞山	有田とし江
加藤雄人	田中富美湖
岸本無人	森田華子

ほか会員一同

愛染帖

橘高薫風選

八尾市 高橋 夕花
樹海にも小さな小さな花が咲く
この辺りで出口がほしい雨季の中
和歌山市 西山 幸
朝顔の蔓未来とは何だろう
生き残るための水襲に水を汲む
大阪市 小出 智子
母が死んでそれから母の夢をみぬ
あわやいくたび跨いで通る落し穴
笠岡市 木山 遠二
生き死にを気にせぬ顔で八十を越え
猫と遊ぶ大の男のあわれなり
今治市 月原 宵明
社長室淋しがり屋のやかまし屋
アルミ貨の賽銭底へときどきか
青森市 工藤 甲吉
街角に笛を売る人ねぶたくる
ふるさとの説こよなき味・かおり
鳥取市 河村 日満
言訳を直線で衝く父の性
信号無視の明けのペダルを許されよ

米子市 八木 千代
暗闇にひとつところがる銀の鈴
笠伏せて平家の裔の盆踊り
今治市 矢野 佳雲

平均の寿命くらいで逝てなるか
広いなと言うたら海がほへんだ
鳥取県 鈴木 村風子
まごころを溜めると青い淵になり
柿の木とお伽噺を切り倒し
大阪市 津山 刀水

虫籠であわれな虫として終る
モナリザの微笑やっぱり毘だろか
寝屋川市 柴田 英壬子
ゴマスリはとうに姿を消している
年上の女がラッと態度変え
町田市 竹内 紫鏑

外野から映る投打の化かし合い
囑託に握手求める人が来ず
岡山市 川端 柳子
ゆすら梅声無き声を宿す紅
音も無く赤いてんまり横切れり
和歌山市 浦野 和子

うつし世と来世の境とぶ螢
虫売りもしんこ細工も風の中
堺市 大道 美乙女
人形になって耐えてる金しぼり
対話ない夫婦に昏れる雨の窓
今治市 越智 一水

星のない夜へくちなしよく匂い
割勘がいいよお前も労働者
高知県 赤川 菊野

人生に照る日曇る日日記帖
病床の夫と老後の話など
富田林市 藤岡 花梢

ピカピカと光る生き抜く汗である
冷汗かくたびに人間臭くなる
松山市 谷 真風

踊るのが好きな阿呆で踊りすぎ
黒板に一句書かれた農の土間
三重県 坪田 冬花

歌う時だつてかなしい時もある
聴えない耳でとんでもない返事
岡山市 岩道 博友

雲隠れしたのが選挙に舞い戻り
脇役のスタッツばかりで気が揃い
倉敷市 水粉 千翁

砂もれて昨日を耐える白い指
次々と聞き出す酒を注ぎにけり
西宮市 野呂 鶴汀

石出せば鉄で受ける夫婦です
核の傘気どられぬようさしてくれ
唐津市 木塚 素石

倅せも山の彼方で黄昏れる
桜散る人の退き際笑いつつ
八戸市 島田 昭治

戦艦があつてボートを漕ぐ港
騒いでもいつかは沈むいくさ船
倉敷市 小野 克枝

鳥取県 石井 雅水

乾杯のジョッキへ酔えない顔うつり

大阪市

大野 武太

金持が弱音吐いてる防衛論

青森県

岩 渕 一 星

胸張って見ても肋骨目立つだけ

寝屋川市

稲 葉 好 子

急患にドラマの医者はよく喋り

京都市

山 本 規不風

剛情な女に強い星はない

大阪市

清 水 健 司

長男の手品に拍手をしておこう

大阪市

川 口 弘 生

人哀し愛確かめる肌に触れ

兵庫県

辻 文 平

孤立とのたたかい故に駆け出せぬ

鳥取市

両 川 洋 々

土愛す因果実らぬ稲を刈る

東大阪市

市 場 没食子

遺言の中に拝辞と死後叙歎

尼崎市

黒 川 紫 香

天国も地獄も値上げしたのかな

高槻市

若 柳 潮 花

憎しみが裂けたら黒い血がこぼれ

島根県

堀 江 芳 子

盃へ昔むかしが湧いてくる

島根県

大 野 酔 夢

女にも母にも乳房は二つある

松江市

舟 木 与根一

鮎解禁赤字線にも風物詩

唐津市

久 保 正 敏

カラオケが白秋の酒を蹴散らかし

開花した証しのちさい実をつける

岡山市

井 上 柳五郎

すぐ笑う妻で涙にもうさがる

奈良市

森 田 カズエ

親に負け子に負け一生平和主義

岡山県

嘉 数 兆代賀

苦と楽を縋り縋り長い糸が出来

唐津市

田 口 虹 汀

約束にこだわりすぎる薔薇の彩

兵庫県

遠 山 可 住

絆から骨までぬらす雨が降る

綾瀬市

大 山 と 金

鈍行に乗れば飯代高くつき

倉吉市

奥 谷 弘 朗

行き過ぎる位の気迫見せなはれ

平田市

久 家 代仕男

湿っぽい話ネ電灯つけましょか

島根県

堀 江 正 朗

顔右へ左へ淋しき紛らわす

米子市

田 中 亜 弥

立読みで教養少し身につける

唐津市

桑 原 掬 治

足とりが決めぬ前に来た風

藤井寺市

児 島 与吊志

他人さんに親切そうな太い指

和歌山市

福 本 英 子

限界へ掌の中の石熱くなる

和歌山市

若 宮 武 雄

月見草闇夜も炎える性哀し

松江市

豊 田 巡 歩

両極で旗を振るのはひと握り

岸和田市

福 島 せつ子

目鼻立ち揃った顔のうす化粧

米子市

野 坂 な み

口下手の催促だから文字を選る

大阪市

中 西 兼治郎

スポーツウェアひょろ／＼と杖で行き

米子市

青 戸 田 鶴

それなりのポーズが板にボスの座に

岡山市

原 田 いとよ

節約は妻にまかせて梯子酒

旭川市

朝 倉 大 柏

三浪もすると思わぬからおだて

高槻市

田 崎 あき子

顔役の無事に終らす慰霊祭

京都市

山 本 桐 下

古いラジオに亡父が居た八月十五日

大阪市

中 野 忠 廣

家庭不和靴の泥にもにおってる

尼崎市

奥 山 美智子

振り向くとわたしの顔が消えそう

青森県

五十嵐 操 史

相談所脱税手ほどき教えます

桜井市

谷 口 梨 郷

働ける日を待ちわびて薬のむ

大阪市

杉 本 智慧子

気を鎮め自然の風を感じ居り

東大阪市

竹 中 綾 女

衣紋竿の朱女ひとりの住居らし

米子市

林 瑞 枝

突発の事故で不倫の恋終る

松原市 佐藤 藤子
芋の葉に織姫の心露の玉

島根県 木村 はじめ
竣工式飯場夫人は無表情

米子市 桑原 伊都
知名度へ名誉会長かつぎ出し

米子市 菅井 とも子
温めた椅子を会長離さない

大阪市 村上 喜代美
納骨へやがては自分も子に抱かれ

羽曳野市 麻野 幽玄
蓮開く花の萼へ亡母を乗せ

高知県 松岡 三吉
好きな人のためなら私踊ります

豊中市 満仲 きく子
不公平ではないですか更年期

島根県 岩田 三和
下りより一本多い上り線

島根県 西村 早苗
白髪を下げて不徳のいたりです

岡山県 荻野 鮫虎狼
失業をしても男に唄があり

大阪市 朝倉 利義
ゴキブリのヒゲがかわいい妻の留守

岡山県 松本 元江
トンと押す風の強さに振り返る

寝屋川市 江口 度
子沢山夫婦げんかも派手にやり

八尾市 山下 みつる
救急のためとは言えど美人抱け

今治市 八塚 三五島

考えを直せば腹の虫が鳴り

吹田市 西川 景子
犬小屋も大も干される梅雨晴れ間

岡山市 原田 凡太郎
髭だけが一人前の子に困り

浜田市 佐々木 裕
爺婆に小鰻二ひきの今日が暮れ

宝塚市 吉田 笑女
老い二人半分税に差し引かれ

尾鷲市 渡辺 伊津志
搾り立てのジュースのような娘が走る

鳥取県 羽津川 公乃
一服の目に蟻の列慌し過ぎ

米子市 石垣 花子
建前も本音も小心口に出し

岡山県 稲岡 正之
Uターンで過疎の冷たい雨に会い

米子市 政岡 日枝子
ビバークに生きたいメモと母の名と

兵庫縣 野々口 ゆう也
夫婦の絵濃淡の彩出し合つて

岸和田市 古野 ひで
花ありき女の四季に灯をともし

鳴門市 八木 芳水
なににつけ一時しのぎと言つ父で

京都市 都倉 求芽
マネキンが軽い財布を見据えてる

守口市 羽原 静歩
アリナミン呪文のように今日も呑む

奈良県 宮川 古都路
大峰の御来迎拝まず吉野路へ

米子市 小西 雄々
泥くさい海へ人魚も顔みせず

大阪市 白石 潔
啄木ならこんなとき長い手紙かく

兵庫縣 森脇 和子
春の街気まぐれ同士歩を合せ

岸和田市 原 さよ子
あこがれた主婦專業も物足らず

東大阪市 齋藤 三十四
教科書の第九条が後退す

和泉市 岡井 やすお
団体の子ら男から坐つてく

大阪市 小野 風童
似ていると言われて母を惚んでる

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「胸」 選者 森中恵美子

締切 9月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町6-4 NHK

発表 大阪放送局 老後をたのしく係

9月26日(土) ラジオ第一放送

午前9時15分から

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

山内 静水

はつきりとさせる言葉を辞書でひく

高杉 千歩

物ごとをハッキリとさせるためには、あくまでも慎重でなければならぬが、その余りに、官僚の文章のようになっては、問題は解決出来ない。その点、下五は作者の言動を不動のものにしている。

正直に生きたい肩をたたかれる

津山 刀水

正直者は損をする、馬鹿をみる、と承知して、善人は悪人には尚なれない。所詮正直者は、顔を伏せがちに歩くしかない。そんな或る日、肩をぽんと叩き、励ましてくれる人に出会ったのである。生き「たい」に深い人柄がにじみ出ている。

ポーナスの税金少うしまからぬか

工藤 路子

軽く表現しているが、実に痛烈、働く者の怒りにも似た叫びが伺える。

脱税の桁増しとも哀れとも
衣食住足りて蒸発した女 拙吟

田中 叶

ただ、おんなの匂いのみ、妻として、母親としての匂いを感じるこの出来ない匂であるが、蒸発後のドラマが展開してくる。

サン格拉斯仲間意識が掛けさせる

朝倉 大柏

仲間意識を高揚させることは大切であるが、一歩誤ると危険、集団となって暴走する虞れさえる。「いけないこと」だからやる若者「ならぬこと」をなす大人、しつてではなく非行の一貫性が日本にあるのでは。

生命保険満期 趣味に健康支えられ

朝山千世子

万が一の時に、苦しい家計の中から掛金をひねり出してきた。子供達もそれぞれ何んとか家庭を守っている。その上に今の私には生き甲斐を感じさす趣味があることは、おかげさまで一語に尽きる。

無理をして歩いてるらし母の癖

松川 芳子

癖という文字からは余りいいイメージは湧いてこない。どんな癖があるのか。母親が精いっぱい姿勢を正して歩いている姿が浮んでくる。何時までも若く、美しいお母さんでいてほしいと願う、子供の真情が麗しく絵として書き出されている。

きつと飛ぶ一羽を希う千の鶴

市川 鱗魚

歴代の総理としては三人目、平和祭式典に

鈴木総理が来広されるそうであるが、あの碑文の一字一字を、声を出して読んでほしいと願わずにはおられない。軍拡論者の吹くラッパの音色の日増しに高くなればなるほど一羽を希う鶴を折り続けることを忘れてはならぬ。散歩から帰れば味噌汁待っている

堀江 百代

句主は女性と思うが、待っているが夫であろうと、妻であろうと、どちらでもない。いたわり合ってつましい夫婦の生活が描き出されていて、味噌汁の匂いまで伝ってくる。失業をしても赤ちゃん生れて来

山下 勝一

子供を道連れにという痛ましい記事の多くなってきた昨今であるが、この句にはそんな影はみじんも感じさせない。むしろ生れてきた子供のために、生き抜かねばの迫力さえ感じさせる。

浪人のたまに晩酌遠慮する

岩淵 一星

はた目にはどうあれ「たまに」に人間性が出ていて、見逃すことの出来ない、笑うことの出来ない深い味がある。

三十年連れ添う妻の寝息聞く

久保 植三

いままで一度だって、思いも氣にもしたことのなかった妻の寝息、ある夜ふと聞くとはなしに聞いて、やつと妻の苦勞が分ったのである。そう気付いてからこそ本当の夫婦である。お倅せにと祈らずにいられない。

数句記載出来なくて申し訳ありません。

私の台風記

台風の恐さに

貧富の差はない

阿部 柳 太

まるで包丁で魚の鱗をはぐように、台風にかかると屋根瓦がバラバラと宙に舞い上り飛んでゆくのです。商店の看板も鼻紙を丸めたように道路を転がってゆくのですから、あまりません。

隣りの家の屋根瓦の落ちる音や、植木の悲鳴にも似た風の唸り声を、家のなかで聞きながら、只一心に台風さまのお通りになるのを少しでも早くと心よりお祈りするしかありませんでした。

昭和九年といえは九月一日、叙情画家であった竹久夢二が五十歳で、長野県富士見高原療養所で亡くなった年であります。

その十月二十一日の室戸台風でありました。当時私の一家は堺市中之町東二丁目に住んでおり、私が十五歳でした。

父は「こんなとき貧亡人は徳や、風で傷んでも家は家主のもんやし、両隣りの大きな家は風除けになってくれるし、自分の命さえ守つたらええだけや」と最初は笑っておりましたが、そのうちメキツメキツと家鳴りがして家全体が浮くような気がするのです。

父は顔色をかえて、母と私に申しました。「えらいこつちや、お前は一番小さい子どもを、龍太郎は大きいほうの妹二人を、後の子三人は俺がみる、みんな布団を頭からかぶり向いの石屋の墓石や燈籠は危いから、できるだけ大きな石材の間に逃げこめ」と命令をしました。そのうちだんだんと台風がおさまりはつとしました。

「地震が一番恐いわ」と云うひとがありましたが、ほんとうの風の恐しさを知らないかただと私は思っております。

当時の堺市調べによると、死者四二四名、行方不明一三名、重軽傷者六六八名にのばりました。

風避難 割り当てにする子沢山

——三本松火葬場大破——

風の神のこす火葬も露天焼き

——遺体収容——

泥の手が虚空をつかむ室戸風

台風におもつ

大矢 十郎

今年も、いよいよ台風のシーズンが訪れた。毎年の事ながら、大なり小なりの台風が、二つ三つは決まってやって来る。梅雨時の降雨量が少ない年ほど、大型の台風を覚悟せねばならない。今年のようにカラ梅雨がいつしか梅雨あけを宣言して、真夏の太陽が照りつける年こそ、最も注意して厳重なる警戒が必要であらう。

台風の進路に母の故郷がある

雀踊子

気象庁のデータに依る台風予報は、残念ながら、過去二十年間に三回位しか的中の記憶

がない。台風が発生地点及び時刻、風速においては信頼出来るが、肝腎な雨量と進路に関しては大きな計算違いが報道される事が多い。

台風の進路を示す扇型

塔 泉

台風が進路変えたと気象庁

十 郎

こんな無責任な予報に、紀伊半島は幾たび恐れおののいた事であろう。来なくて辛い用心に越した事なしと、家族で喜びあえるのもありがたい事ではある。

台風の行くぞと見せて肩すかし

静 夫

気象庁に又脅された釘を抜く

十 郎

台風は空気の大规模であり、地球の深呼吸であろうか。これも自然の摂理、地球の新陳代謝として、生命あるものは従わねばならない。それにしてもあの暴走ぶりには、ゆめゆめ油断は禁物である。

台風一過お詫びのように青い空

十 郎

被災者に済まぬが台風から景気

十 郎

台風の爪跡、それは無惨なものである。時には家を呑み、人命を奪う事もしばしばである。然し、この尊き犠牲を教訓として、復興された河川、防波堤、山肌、道路等の充実を見るにつけ、あの台風がなかったら、果して改造されていたらどうか。

低地に住んでいた人達も、現在のような立派な土地に立派な家を建てて、明るく、そし

て以前より活気ある生活が出来得たのだろうか。台風は教訓と試練を与え続ける事であろう。上陸地名乗る台風世に残り

十 郎

大雨を連れて来た台風

長 野 文 庫

どうしても酒の記憶が湧いて来ず 村風子
先般本誌で、こんな句を拝見したが、私の
台風に関する思い出は、まあこんなもので台
風の恐ろしさに出くわした事が無い。と言っ
た、伊予路は概して台風の通過が少なく、
もちろん過去に台風の襲来が無かった訳では
ないが、強烈な印象に残っていない。

一説には、これは石鎚山系が壁になってい
て台風も防ぐのだ、とも言うが、まさか二千
米に足らぬ山並みが大自然の猛威を防ぐとは
思えないから、これまで運が良かったのかも
知れない。

話は変わるが、今治市には北の方に「浅川」
南の方に「蒼杜川」が流れていて、どちらも
川の近くに県立高等学校がある。

校歌みな素晴らしい名の山と川

栗

の句の通り、それぞれの校歌に、その川が詠
みこまれているし、その川にまつわる伝説や
情話も多いのである。何十年前に浅川が決
壊して私も被害をうけたが、まあちよつとた
まげた（驚いた）程度であった。

ところが絶対安心していた「蒼杜川」が先
年、台風が連れて来た大雨で決壊寸前になり
全市民が色を失ったことがあった。

この辺で少しはほらも吹いておき 久米雄
でなく、真正正銘の話で、避難指令まで出た
のであるから、相当うろたえた。

結局、自衛隊に出動を要請して協力しても
らって、全市民の活動も加えて、どうやら決
壊を防いだが、一時はどうなることかと心配
した。

計は常にかかるかたちで来る白刃 薫 風

台風と集中豪雨

原 田 明 春

昭和三十二年七月二十五日、長崎地方を襲
った台風は豪雨と化し、諫早市は一時間一〇
〇〇ミリという近代稀に見る雨量を記録した。

前日からの雨は止むことを知らず、私は役所出勤のため雷雨の中を膝までつかり、出勤した。雨は降り止むどころか、午後からは次第に激しさを増し、バケツで水をうつす程であった。

午後二時頃、職員の家から「家が危険な状態となったので、すぐ帰してほしい」との伝言あり、直ちに家に引き返した。帰った三〇分後職員の連絡で川添いの数軒が鉄砲水に吞まれ流失したとの連絡あり、職員の家と家族は無事とのことにはっとする。

役所も、裁判官の指導により、当直員を残し午後四時全員早退ということにした。私は運悪く当直で居残りであった。

家は妻と幼い子供のみであり、気掛りであった。午後六時三〇分頃、市内の職員から床上浸水の報があった。私は他の当直員に電話番をまかせ直ちに職員の家へ急行、途中胸まで水につかり、雷雨の中を職員の家に着く。すぐに役所へ避難するように奨め役所へ案内した。その後有明海の満潮と重なり、その町すじは天井まで水につかった。

夕食を済ませ吾家に連絡を取ったが応答なし、心配の余り、警電にて駐在所へ連絡、話しては水かさが次第に増し小野地区も危険な状態であるとの連絡あり、私は家に一応帰る

ことにした。私の家は約二里長崎県の穀倉地小野平野のと真中である。濁水の海と化した中を国道の電柱を頼りに泳いだ。泳ぎにかけては日本海の荒波育ちで充分に自信はあった。まわりは薄暗く濁水の中を泳ぐこと一時間余り、一人取残されたような気で心細く、やっと家にたどり着いた。妻子は床上浸水の中押入の棚でおびえていた。私の姿を見るやわっと泣きだした。私はすぐに妻子を天井裏に避難させた。私が家にたどりついた直後、市内は濁流に吞まれ、あの大惨事となったのである。私達は五日間天井裏でネズミのように過した。全員無事で六日目に自衛隊の救援を受け避難所に移された。

家は崩れ、市内の至るところに死骸があわれない姿で散らばっていたのは濁流が引いた後であった。一〇〇〇余名を越す死者と家屋の流失、全壊の地獄絵になろうとは、誰れもが予想しなかったことであらう。

台風、それに伴う水害の恐さ、生れて四十余年始めて知った一生一度の恐さであり、又水害に対する尊い体験でもあった。

◎生きて居給えと希ふはかなきそここに瓦が埋れ死骸が埋れ 山口明子

◎担架にて屍がゆけばうつしみの足裏ひるがへし人らゆきゆく 大我幸藏

文化祭参加

第31回岸和田市民川柳大会

日時 昭和56年10月11日(日)12時半開場

会場 岸和田市民会館地下会議室

柳話

橘 高 薫 風

兼題

“悪友”

“海”

“軽い”

“ビエロ”

“続く”

“鎖”

野村 太茂津 選
中田 たつお 選
香川 酔々 選
西田 柳宏子 選
榎本 聡夢 選
川村 好郎 選

席題

二題

藤井 二三・河野君子 選子定

呈賞

市長賞・議長賞・教育委員会賞・

〆切

文化協会賞・操子賞

二時 各題二句

(出句は出席者に限る)

会費

五百円(句集皇)

主催

岸和田川柳会

岸和田市土生町一九八九―八

高橋 操子内

TEL(0724)22-0049

岳人さんの五百回登頂記念句会

金剛山へ私達も登った

東京滞在中の千代さん、北海道旅行中の美世さんのお二人とも予定通り合流出来、同勢七人、八尾駅に着きました。駅頭では岳人さまらしい暖い心配りのおむかえを受け、心はずませて会場の料亭「日本海」へ向いました。素敵な会場には、岳人さまのお人柄、交際の広さを語る多彩な選者の名前が並び、田舎者一同気を吞まれる思いで席につきましたが、流派を越えた握手、なつかしい方々との語らいにすぐ会場の雰囲気にとけ嬉しく花束を贈らせていただきました。

石垣花子

天笑さんの軽妙な司会に、豪勢なお膳の並ぶ懇親宴の幕が開き、栗先生の奥様の詩吟に酔夢さんの詩舞、好啓先生の謡とつづき、「よいこらせ」のおはやしで盛り上る河内音頭、太茂津さんの浪曲、番傘の良子さん、森中恵

美子さんなどと、気軽に舞台上に上られて、ふれあいを大切になさる岳人さんならではの、あたたかい和やかなムードが溢れ、歌に合せ踊るグループ、写真におさまる人たち、みんなが喜び合い溶け合った宴でした。

青戸田鶴

懇親宴も和やかに終わったあと、栗先生の御好意で、会場「日本海」に泊めて頂きました。八尾木の町の銭湯へ、皆でそろって出掛け、汗と緊張を流しました。

高杉鬼遊さんと奥さまの千歩さん。好啓先生を囲んでの楽しい語らいの後、広やかな豪華な部屋で大会の感動と余韻。ほっとした安堵感も抱いて、修学旅行のように枕を並べてゆっくり手足をのばし、楽しい夢を結びました。

沢田千春

前日の余韻を抱いたままの二日目、お疲れであろくに、岳人さんは私達のために一日中つきつきり。御好意に甘えて金剛山へ。ロープウェイを降りて少し徒歩で山頂まで。転法輪寺へお詣りし、山小屋のジュースでのを潤し、そして高々と掲げてある五百回樹立の輝かしい御名前を皆さんと確認し、そのたゆまざるご努力、根性、鍊成によって一層培わ

れたであろう岳人さんのお人柄を改めて感じさせられました。

桑原伊都

金剛の峰を岳人さんと歩けただけでも、勿体ないほどの感動なのに、西行法師終焉の地、弘川寺まで案内して頂きました。

願わくは花のしたにて春死なん

そのきさらぎの望月の頃

自然、芸術、仏を求めつづけ、その願望どおり、みごとに生涯を終えた西行の眠り続ける古塚の前で、好啓先生の瞳は静かに燃え岳人さんの眼鏡は濡れて輝き、私達は、それなりの感懐に浸りました。本堂で頂いた冷えた玉露のおいしかったこと！

八木千代

残暑お見舞い申し上げます。

去る七月二十六日の私の金剛山五百回登頂記念句会には各地より多数ご出席下さいまして、盛会にさせていただきました。ありがとうございます。

厚くお礼申し上げます。

板尾 岳人

始 発

植山武助選

常連の座席が決っている始発
 帰心矢の如く故郷へ発つ始発
 目覚しをも一度まわす始発の子
 混む車内始発の客は眠りこけ
 終発が始発にかわる村のバス
 商人の活気匂っている始発
 乗り換えがあるので始発の列車にし
 ハネムーン虹の彼方へ飛ぶ始発
 駅近く住み目覚ましになる始発
 修学旅行一睡もせず始発
 終着で着いて始発で発つ故郷
 魚くさい合羽がぬむっている始発
 滑りこみいつもの客が来る始発
 まだ昨夜の酒が残っている始発
 始発からストを知らずに来た一人
 いつもの顔揃って始発車が動き
 スト解除始発待つ人並びだす
 始発車に覚め切つてない顔で乗る
 孤々の声人生と云う名の始発駅
 間に合う始発自分の顔になる
 始発ヘルドラマそれぞれ待っている
 夕刊が網棚にある始発駅

不二 悠泉 伊津志 実 掬治 茶人 七面山 景子 芳子 道子 甲子郎 重人 素身郎 松太郎 武水 綾珠 テル 春日 文平 柳子 カズエ

磯の香を始発のベルにまにあわせ
 始発駅出来る噂で地価上がる
 有休はもうなし始発に乗り遅れ
 終電の匂が残っている始発
 始発までバスが繰り込む団体旗
 古里の味覚も共に始発駅
 始発出て張込み刑事大欠伸
 スト妥結させて始発へ拍手湧く
 挨拶で和む始発の隣組
 始発まで車内で明かす事故列車
 毎朝を始発仲間のなれた足
 始発駅詠りの多い客で占め
 始発バス空っぽ雨の日曜日
 茶柱の立つまで汲みし始発の子

御前 やすお 本魚 本蔭棒 登美也 義美 柳五郎 洋々 喜醉 峰雪 弘朗 早苗 一路 素石

花 束

大森孝華選

父の日に花束届いた白いばら
 花束の中に王手がかけてある
 美しい言葉添えて花束を
 美才師にも花束がくる平和
 花束もなく下積みは掃き出され
 花束に包まれ嫁ぐ娘の笑顔
 花束を抱いて下積み長かった
 花束が事故へ小さな善意来る

勝美 佳雲 醉夢 宵明 洋夫 哲夫 登美也 浪速子

佳 妻だけが送る始発で左遷発つ
 臍の緒が切れ人生へ始発する
 もう一度寝ろよと始発で夫は発ち
 五十年始発で通うちびる靴
 坐つたら夢のつづきになる始発
 人 市に出す花の香先取りする始発
 躍進の町へ始発駅伸びてくる
 出稼ぎの始発へ子らも早く起き
 七転び男五十で乗る始発

宵明 義美 花子 佳雲 可住 右近 与根一 大柏 武助

花束へ英霊無言の語り草
 妻となる夜の花束ねむられず
 花束へ握手する手も添えて出し
 栄光の花束なんでも散り急ぐ
 披露宴で受ける花束血が通う
 転任の年に花束を山と抱き
 花束がすすり泣いている慰霊塔
 花束がリングに散って座を追われ
 スポットで花束うける娘に育ち
 花束は左遷に触れず贈られる
 花束が涙をさそう事故現場
 一徹は花束受け受ける喜寿
 定退は花束受け受ける喜寿
 妻見舞う花束庭の花だより
 その人の瞳と花束にそのすべて
 花束を波間に落し子を偲ぶ

夢酔 久仁於 掬治 芳水 七面山 凡太郎 正敏 勝一 明朗 カズエ 大柏 喜醉 胡顔子 裕 古都路

—

初歩教室

題 — 面影 —

本田恵二郎

味わうということの意味を大別すると、三つの意味がある。

(一) 味見 食物を噛みしめ味い食べる

(二) 玩味 物ことの意味や趣きを深く考える

(三) ものごとを経験して印象に残すこと

川柳を味わってみる場合も上記の(一)(二)(三)が混然一体となっているのである。

味の佳い句をそれぞれの感覚で発見して、そのすぐれた味を噛みしめてみる。さらにその意義や趣きを掘りさげて考えてみる。そして自分の貴重な体験として深く印象に残す。こうした句の味わい方をするなれば選句眼も肥えるし、批評眼、鑑賞眼も豊富となって、それが作句力の原動力となり、向上進歩ともなるであらう。

面影が廻り灯籠で見えかくれ

(面影が見えかくれる走馬灯)

面影をちよつぱり残す同窓会

景子

兼治郎

(面影を残し合つてゐるクラス会)

初恋の面影うつし花火もえ

(初恋の面影浮ぶ遠花火)

笑い顔昔の顔がかすかなり

(おきな顔思い出させた片笑くぼ)

面影を残さぬほどに村の過疎

(過疎かなし面影すっかり消え失せる)

息絶えた戦友の面影この胸に

(息絶えし戦友の面影夢に来る)

尼寺に天平の面影ある御本尊

(天平の面影偲ぶ尼の寺)

アルパムの若い遺影が色あせる

(面影を子に残して七回忌)

あの人に似た面影に後つける

(あの人に似た面影が引き寄せる)

亡母に似た面影思わず喋りかけ

(亡母に似た面影にふと話しかけ)

面影がときどき邪魔をしに覗く

(面影を追つてはかない夢を見る)

面影は夢二の女よし越し

(来竹桃咲いて面影甦る)

月と笛面影残す京すすき

面影で立直らせた母の霊

(立直れよと亡母の面影が云う)

和ダンスに父の面影詰めてある

整形で面影がきれいに消える

茂子

登舟

同

梨郷

同

風童

同

ふみ

同

元江

同

勝美

同

みつる

同

美智子

同

第15回東大阪市文化祭参加

第九回 川柳大会

日時 昭和56年10月10日(祭日)

正午開場、午後一時半

会場 東大阪市立公民館二階 視聴覚教室(近鉄永和駅すぐ)

おはなし 川柳塔社常任理事 阿部 柳太氏

兼題 「短気」 深江 勝人選

「わさび」 堀江としを選

「ネクタイ」 小出 智子選

「ときめき」 定金 冬二選

「ともしび」 中尾 藻介選

「道」 梶川雄次郎選

「夢」 竹中 綾珠選

席題 一題 兼席題共各一句、出席者に限る

賞 東大阪市長賞他

賞 五百円

会費 二千元(会場で受付)

懇親宴

主催 東大阪市文化連盟

後援 東大阪市川柳同好会

東大阪市

東大阪市教育委員会

(整形で消えた面影惜しまれる)

面影を追う影もない大惨事

(面影を追うすべしな事故現場)

面影が彷彿子らの謝恩会

(謝恩会若い面影さげて寄り)

点から線辿り面影浮き上り

(点と線辿れば面影浮いてくる)

面影が皺と白髪はなかつて

(面影を皺の中から見つけ出し)

面影が戦後のプランクふつ飛ばし

四十年振り目尻に面影残つて

(四十年振り目尻に見つけた面影)

初恋の面影妻が秘めていた

面影を共にえがいて行く二人

(面影を描き合い生きてゆく)

面影の中に先代の恩が住む

面影は美人の母をそのままに

(面影は美人の母に貰うけ)

逝きし児の面影今お母は追ひ

(逝きし児の影を追ひ追ひ母老いぬ)

忘れえぬ面影抱きて十五年

(面影が胸の小箱で生き続け)

初恋の面影消えず五十路ゆく

肉親のどこかに父が母がいる

(はらから父の面影分ち継ぎ)

面影を偲べば若き日走馬灯

面影を偲ぶ母は私より若く

(私より若くいる亡母の面影)

面影が似てると素性聞きたがり

胡頹子

同

柳五郎

同

三五島

同

山久

同

保夫

同

貞子

同

武水

同

千子

同

芳枝

同

面影を胸にしっかりと寡婦で生き

(面影にはげまされつつ寡婦生きる)

伴せが面影だんだんうすれさせ

面影を入道雲へ描き出す

(面影を描けば入道雲が笑む)

面影もなしテトラポットの埋立地

面影に墓を洗うて草をとり

(墓を洗えば面影が笑みかける)

早逝の父に似てるとまた言われる

気性まで亡父そっくりと褒められる

(面影も気性も亡父さんそっくりぬ)

面影をつなぎ合わせてモニタージュ

面影を頼りに故国へやつと来る

(面影を抱いて故国の土を踏み)

愛執の面影に病む星月夜

悩しの面影消したい下心

(面影に追われ追われて逃げまどい)

面影が心の隅に住んでいる

面影よ帰っておいでと独り言

面影を追うてステップ踏みはずし

遠花火遠き面影追う夜空

面影が似てて良い時悪いとき

似たくない面影いやでもつきまとう

健やかな面影だけを抱き続け

あの頃の面影だけのび白髪抜く

胸に巣くう面影払う二児の母

面影を追えば彼氏が甦る

寄書きへ面影一つずつ浮ぶ

合掌へ祖母の面影かこまり

同

紀久子

同

義美

同

昭治

同

やすお

同

匂味地

同

茂美

同

露杖

同

忠広

同

佐代子

同

芳水

同

凡太郎

同

謀叛したその日から面影消える

弟子時代の面影もなく一本立ち

面影は整形外科に置いて来た

面影は矢張り黒子と片笑くば

面影はエブロン国防婦人会

面影を偲べば空襲警報鳴る

先代の面影がある石灯籠

日の丸の寄せ書の中の面影よ

面影は夏も和服の身だしなみ

忘れ得ぬ面影この子が生き写し

面影が亡夫そっくりな孫の守り

面影を追えば現代つ娘が嗤う

恩愛の傘に面影棲んでいる

面影がしきりに冴える夏銀河

健司

同

公乃

同

三十四

同

武太

同

利美

同

英子

同

寿子

同

題 賭けるー 9月20日締切(11月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

(七二一) 本田恵二朗

故小西無鬼氏のご遺族から

満中陰忌粗供養として

金一封 寄贈頂きました

川柳塔社

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川醉々

■川柳塔社篠山支部では、柳誌ささやまNo.323号で小西無鬼氏追悼の特集を行なった。青葉句う峰どの峰も恩師の碑 遠山可住

■国鉄川柳(事務局盛岡)では、55年度全国鉄川柳連盟年度賞作家に、高橋朗風氏を推選した。

■川柳宮城野社(仙台)では55年度宮城野賞を発表。同人では、「ローン」地獄逃れやわらぐ北枕、他一四句狭間武氏。会員では、「明日を盛る皿は大い方がよい他一四句、小野日生氏」が受賞した。なお最優秀作品に、「終章を書きたく核が疼いて、盛合秋水氏」と決定した。

■菜の花句会(八尾)では八尾市民サービスセンターで7月5日から16日まで、

川柳作品展を開催。西尾某主宰をはじめ、橋高薫風氏他会員多数の参加があり、八尾市文化向上の一助を果した。

■柳誌松江番傘では、郷土川柳作家作品を連載。島根柳界の歴史をしのぶよすがともなり、きわめて好評である。なお、島根県文芸大会は9月15日浜田市市民会館で開催予定。

■宇都宮雀郎会主催、第17回雀郎まつり川柳大会は、9月6日宇都宮市桜4丁目くろかみ荘で開催される。

■鳥取県川柳作家協会(会長河村日満氏)主催による第4回鳥取県川柳大会は、去る3月盛大に挙行されたが、このほど、作品集が発刊された。鳥取県知事賞は米子市の八木千代さんである。

■川柳みどり会主催「緑」200号記念川柳大会は、全国各地より百数十名の好作家を集め、盛会のうちに終了した。貨車過ぎていちまいの蝶音になる 墨作二郎

■川柳能因会(福島)の前会長山中鹿之助氏の句碑が建立された。

行く道の思えば遠く空のは 鹿之助
■第13回山陰川柳大会は去る7月5日盛大に開催。参加者百余名にのぼった。総合第1位は、両川洋々氏であった。

■川柳人協会主催による昭和56年度文化祭川柳大会は左記の要領で行われる。日時・11月3日(文化の日)午前11時

会場・港区六本木五―一六
四―五麻布公会堂(港区役所麻布支所三階)地下鉄日比谷線六本木駅下車、東京タワー方向へ進みロアヒル先き角を右へ曲り左側、徒歩十分。

文化祭参加作品・1句記名自由吟、旧作可、含投句者、発表誌に全作品登載。
宿題・第一部(出席者)

前触れ 藤島 茶六選
笛 堀口 北斗選
憎いネ 井上 恵世選

ヒット 佐藤 正敏選
漬物 多伊良天南選
どきどき 内山 舞將選

虎の子 志村 剣人選
席題・四題(宿席共三句吐) 野村 圭佑選
特別課題・一題/山本穴道

郎選 締切・宿席特別課題共一時半
会費・金千円也 記念品、粗飯呈
賞・宿席合点三十位まで呈

第二部(投句者)
逢う 小谷 源氏選
無口 高橋 肖五選
不意打ち 加茂 如水選
トンネル 田中 白牧選
寝言 浅田扇 啄坊選
自炊 黒田 高司選
炊 小林 万川選

平行線 賀波沢 黙六選
投句・第二部のみ(第一部は拝辞)各題三句、題毎に別紙のこと
締切・九月末日消印有効
投句・金千円也
賞・八題合点三十位まで呈
発表誌/一部、二部同時発表(年内発行予定)

〒112 東京都文京区千石3―35―13 白倉寿夫方TEL03―946―4786 川柳人協会

■川柳東浦の会(愛知)では、このほど合同句集ちたの風を発刊された。発行人は、渡辺和尾氏である。ふるさとの駅は小さくみのりの田 稲垣保子 女流作

家が多数参加、抒情に溢れた作品が多い。
■川柳句集「春子」が上梓された。著者は、川柳研究社の幹事青木春子さん。新潟県十日町市在である。

三叉路の別れを風が追いかける 春子

▽同人・柳友消息△

▼辻圭水氏（堺市）今般阪堺電気軌道KK取締役総務部長へ栄転された。

▼植山武助氏（岸和田市）御尊母7月13日逝去。本社より板尾岳人氏がお見送りに参列した。

▼野村太茂津氏（和歌山市）は、柳誌川柳えんぴつ7月

本社事務所移転

川柳塔本社事務所が左記へ移転しました。投句・原稿その他のご連絡は今後、新事務所宛お送り下さい。

〒545 大阪市阿倍野区三丁目2目10-16
ウエムラ第二ビル二〇二号
（阿倍野府税事務所東隣り）

電話〇六―六二九―六九一四

■なおご送金その他会計についてのご連絡は左記会計室へお願いします。

川柳塔会計室

〒581 八尾市中田二丁目三〇二
高杉 鬼遊方

電話〇七二九―九八―〇九二八

川柳塔 社

号へ随筆「肩肘はらずに」を寄稿されている。

▼高橋放浪兄氏（川柳北上吟社主幹）は、去る6月10日逝去。享年68歳。謹悼。

▼山内静水氏（竹原市）は東奔西走。9月の大会にそなえて、多大忙の由である。

▼板尾岳人氏（富田林市）このたび金剛登山五百有余回になったのを機に、金剛山五百回登頂記念句会を富柳会主催・業の花句会後援で、7月26日八尾市割京日本海で開催、集う柳友九十余名で大盛会であった。なお秀句には金剛山頂葛木神社宮司書の色紙がおくられた。

▼清水一保氏（鳥取県）より、山陰川柳大会が盛会裡に挙行されたと報告され、本社の後援に謝辞を寄せられた。

▼佐伯越子さん（米子市）鳥取附属病院にて入院加療中の処八月九日死去八月十一日盛大に葬儀が執り行われ小西雄々氏奥谷弘朗氏本社の板尾岳人氏が参列された

▼橘高薫風氏（豊中市）は京かがみ8月号に、福永清造氏の追悼文を寄せられ、

故人の功績を讃えられた。

▽句会案内△

■業の花句会

時・9月10日（木）夕6時
場所・西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾下車西南歩3分幸福相互銀行裏

兼題Ⅱ 渦（西尾菜）橋（高杉鬼遊）影、大阪風景、燃える。なお10月句会は休会。八尾市市民文化祭10月18日開催のためである。

■東大阪川柳会

時・9月26日（土）夕6時
場所・東大阪中央公民館、近鉄永和駅前
兼題Ⅱ 虫、指図、沈黙、戒める。

■堺川柳会

時・9月14日（月）夕6時
場所・堺市民会館1F会議室（南海堺東駅下車）
兼題Ⅱ 阿呆、傑作、うどん許す。

■南大阪川柳会

時・9月19日（土）夕6時
場所・高松会館（環状線寺田町裏駅下車東百メートル）
兼題Ⅱ くすぶる、食い物、クール、くふう

大 萬 川 柳

「特別」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 三百五十六句
 入選 五十一句

傷心の旅は特急避けて発つ
 堺 ひろ子

特別の仲でもないのに他人の目

特別会員にしている狙いは別にある
 大阪 君子

特別な視線を感じ距離を開け
 和歌山 佐代子

特別のなさが悪い傷をもち
 富田林 花梢

特別の手心当てにする弱味
 米子 みどり

特別な視線予期したニールック
 松江 芳枝

フィアンセに腕をみせたい台所
 熊本 一進

特別は明日へはずむ恋手毬
 和歌山 寿子

特ダネを競うあまりの勇み足
 尼崎 利美

特別の愛が育てたモヤシツ子
 大阪 柳伸

ボーナスが無事なら許す午前様
 大阪 利義

特別な配慮が出来る地位にいる
 大阪 文秋

娘が受験特別暑い夏となる
 大阪 美恵

特別料払って手相へ喰い下り
 枚方 弘

特別の保護を嫌ってトキは死に
 大阪 公一

和歌山 登志代

ポーズだけ特別 行革審議する
 守口 静歩

交野 テルミ
 特別の言葉の裏が気にかかり
 大阪 松太郎

特別に好意もたれる気の重さ
 大阪 道子

冥途でも特別席を願う布施
 和歌山 英子

ポケットに特別手当てが温かい
 東子 悠泉

貴方だけ特別という甘い罠
 平田 代仕男

特別な賞与も組んでノルマ主義
 今治 佳雲

特別な厚意を恋と気がつかず
 八尾 シマ子

お召列車も同じレールの上にあり
 倉敷 春日

特売は特売なりの仕入れです
 姫路 葉香

特訓の汗は悲願へまっしぐら
 堺 哲寿

特別賞出しベテランの顔を立て
 高知 三吉

老人の日の特別が気に入る
 堺 一二三

特別近い距離にあなたの影を置く
 鳥取 露枝

特別光る星に恋しい母が棲む
 鳥取 露枝

君だけに通うシグナル持っている

特別なコネでレールの上を走る
 鳥取 秋女

特別よ 妖しい声でささやかれ
 和歌山 武雄

紅一点特にきれいでない救い
 八尾 美幸

特別の伸と合鍵はくそ笑む
 八尾 美幸

特別の椅子は冷たい風が吹く
 名古屋 枯梢

母の愛に特別はない手のぬくみ
 奈良 保夫

特別扱いされてまわりの目が寒い
 奈良 保夫

特別のはからいそれほど恩に着す
 奈良 保夫

特訓の成果逆転打つホームー
 奈良 保夫

佳句

特に好きで貴方に添うたわけなし
 大阪 満津子

特報はひとりの胸に抱ききれず
 米子 千代

特別の波長で絡みあう視線
 今治 胡顔子

特別な仲に噂がしてしまい
 神戸 どんたく

特別の汗に男の像がある
 大阪 好一

人ノ句

大阪 好一

特別の絆へ義理がからみつ

地ノ句

兵庫 ゆう也

特別な視線を避ける車椅子

天ノ句

大阪 茂子

かけ引きも特別もない陽が炎える

選者吟

特例もつくり行革まともらず

昭和五十六年度

ベストテン(七月現在)

一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	
花	花	君	三	千	雄	テ	美	秋	女	
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	
一五・五	一四・〇	一三・〇	一二・五	一〇・〇	九・〇	八・五	八・〇	八・〇	八・〇	
堀	富田林	和歌山	大阪	高知	米子	交野	八尾	鳥取		
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	
好	道	満	智	み	登	武	文	柳		
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	
八・〇	七・五	七・五	七・〇	七・〇	七・〇	七・〇	七・〇	七・〇	七・〇	
大阪	大阪	大阪	米子	和歌山	和歌山	大阪	大阪	大阪	大阪	

昭和五十六年第十回

「出逢い」 三句以内

締切 九月二十日

第十一回

「柱」 三句以内

締切 十月二十日

投句先

〒592 堺市場上緑町一―三十七

藤井一二三方

大萬川柳係

川柳塔社常任理事会(8月4日)

〈出席者〉 栗・多久志・形水・好郎・吸江・薫風・与呂志・鬼遊・瓢太・潮花・紫香・水客・岳人・柳宏子・天笑・史好・萬的・酔々

【議事並に報告事項】

★栗氏より、本誌引き続き第三種郵便物認可の件及び小西無鬼氏夫人富士子様より、金一封拝受の件報告。(9月号所載)

★新事務所開設は、9月号にて社告、なお、事務所開きは、9月3日とする。

★事務所勤務制を次のように決定。

時間○午前10時―午後4時

月||与呂志・岳人

水||吸江・薫風

金||栗・岳人

★主幹宅へ御礼の件、可決。

★8月7日本社句会席上小谷葉子氏へ感謝状並に慰労金を贈呈する。

(記録・酔々)

火||鬼遊

木||好郎・瓢太

(土・日休)

▼9月の常任理事会は3日(木)新事務所にて

本社 八月旬会

会場 金属会館
七日 午後六時

連日の猛暑も一服、ここ数日八月としては涼しい日が続く。司会の柳宏子さんから中島生々庵主幹、菊沢小松園氏の病状報告、共に経過良好とのこと。

柳話に先立ち、川柳塔創刊以来、十五年の長きに亘り事務局で会計その他事務万端にご尽力いただいた小谷葉子さんが、このほど退社されることになり、栗副主幹から感謝状が贈呈された。

おはなは黒川紫香氏。武庫の荘のお住居に毎日朝早く必ず雀が一羽やってくる。屋根をこつこつ叩くそのリズムで起こされて一日が始まる。まず玄関の植木に水をやる。植木鉢に最近小さな雨蛙が住みつき、水をやる嬉しそくに目をくりくりさせ、時には手の上に乗ってくる。それがとても可愛い。生きものとの触れ合いの中に暮らしているとおっしゃる紫香氏らしい心あたたまるエピソードを披露され、はなはタカラヅカにとぶ。詳細をお伝えするスペースがないのは残念だが、大スターのかげに組長というかくれたスターが

いると脇役の意義を強調された。
初出席は尼崎の奥山美智子さん。
月間賞は児島与呂志氏が獲得。

(史)

(受付) 与呂志・敏・重人
(進行) 柳宏子・記録・重人

出席 与呂志・勝美・雅風・滋雪・あいき
・喜一郎・水客・瓢太・酔々・敏・美智子・重人・右近・紫香・英千子・潮花・川狂子・好子・幸・静歩・柳宏子・ひろ子・頂留子・憲祐・千代三・薫風・悦郎・小路・太茂津・英子・喜醉・武太・三十四・好郎・千万里・糸葉・眉水・射月芳・文秋・翠光・作二郎・千梢・渥一・洋敏・天笑・柳柚・健司・鎮彦・史好・雀踊子・一二三・度・花村・規不風・桐下・吸江・君子・智子・寿子・山久・栗・鬼遊・寿美子・萬的・凡九郎・幸生・春巳・岳人。

席題「八百屋」

神谷 凡九郎 選

季節感失せた八百屋の茄子胡瓜
胡瓜一本茄子一本にびっくり
お仕着せのバックで八百屋囃をつく
今晚のおかず八百屋のうまに
旬の味知らぬ八百屋へひとくさり
朝取りを看板八百屋の太い声
八百屋でもやれとこつこつ叱られる
夏大根句を知らずに売る八百屋
カブト虫に孫は八百屋へいとわな
中流階級以下のくらしと知る八百屋
松茸とレタスは食べない八百屋の子
つむじ風吹けば妬みか茄子に疵

柳宏子 静歩 幸 頂留子 太茂津 吸江 武太 勝美 千万里 智子 寿美子 川狂子

少し太めの腹巻をした八百屋
蟬啼けば八百屋で西瓜買うてこい
ネギ一本キウリ一つと買う男
八百屋ぐらいいのお使い僕が行って来る
茄子の艶みがいて八百屋盛りあげる
無精髭で八百屋に立つて妻の留守
買い易いのは散らかして居る八百屋
八百屋によつただけがおくれた飲み仲間
よく売れる八百屋二度目の声変り
旅に来て八百屋覗くのも女
変屈な八百屋のおっさん負けてくれ
新入荷八百屋が辞引ひいてる
八百屋では夏のトマトが赤すぎる
ほんとうの野菜が消えていく八百屋
ロックバンド八百屋お七の炎呼ぶ
のら犬が見むきもしないのは八百屋
ビタミンが少し不足の八百屋です
持って持って明日は八百屋はお休みだ
ビールなら枝豆でつせ八百屋です
八百屋には無い手作りのトマトです
サランラップめくって八百屋は魔術師だ
転宅祝い八百屋からねぎが来る
木犀町に赤いトマトを売りにくる
ネギ二本負けと声を張り上げる
おこつてくるような八百屋でねぎを賣う
芦屋にも暗い八百屋が裏にある
私のテストを八百屋が今日もする

席題「吹く」

齊藤 三十四 選

この辺でアンマが笛を吹く舞台
吹けば飛ぶような男も意地は持ち

涼一 文秋

鎮彦 作二郎 千萬子 萬的 潮花 右近 悦郎 憲祐 与呂志 春巳 与呂志 幸 水客 酔々 糸葉 吸江 重人 寿美子 三十四 作二郎 春巳 岳人 千代三 凡九郎

涼風に吹かれて蟬の一思案
 掃省して久し振り吹く祭笛
 口笛を思わす吹く反抗期
 母親へ口笛を吹く反抗期
 吹いただけ重荷になった過去の罪
 ロソクを吹いたら女若くなり
 風船を吹く時野心忘れてた
 良い風の座敷に父母の窓を明け
 涼風が吹くと錦を着る山野
 吹けば飛ぶ男女房美人なり
 味噌汁が吹いて芸術ドラマ開く
 ラップ吹く男の腕を信じよう
 風吹けば雄しべ雄しべの愛を生み
 七転び八起目神の風を待ち
 柴又の駅口笛が聞こえそぞ

柳宏子 右近 敏 潮花 喜一郎 凡九郎 与呂志 右近 悦郎 英壬子 岳人 川狂子 悦郎 作二郎

ああ今日は風が吹いてるサウスポー
 シナリオの中で悪女の笛を吹く
 秋風が吹くところ決めを出すつもり
 川床の京の詠りへ風動く
 吹きまくる弁舌信じて見たくなる
 悪知恵を吹き込む声が甘くなる
 一陣の風ほしそうな日章旗
 左遷地へ吹けば飛ぶよな紙である
 吹き替える端役が走る早替り
 吹き抜ける風が中流意識する
 南から吹く風つばめをお迎いに
 ホラ吹きの日二三度バラが咲き
 真夜中の詩人を風がノックする
 戦間機買えと東の風が吹く
 ホラを吹く男の舌は歪んでる

重人 幸 英壬子 萬的 頂留子 滋雀 天笑 潮花 柳敏 英壬子 天笑 鬼遊 千代三

一分間の柳論

川上大輪

川柳は言葉の遊びから始まる。五七五、或は七七の言葉のつなぎ合わせにより、そこから文芸性を見出し、さらに人間陶冶の精神にまで昇華させていってこそはじめて川柳といえるのである。しかし残念ながら現代の川柳においては、私を含め単なる言葉の遊びのみに終っている句があまりにも多いように思われる。詩川柳とか革新川柳とか言われる句の中にも素晴らしい句が多いが、いたずらに難かしい言葉を並べたて無理やり難解に仕上げたような句もあることは事実である。それを

さらに訳の解からぬ評をつけ、もつともらしく鑑賞し優越感に浸っている者も居て、全く精神分裂ではないかと疑いたくなる事さえない。難かしい語句を並べると偉くなったような錯覚を起こすものであるが所詮鍍金はすぐ剥けるのである。新しい句の傾向にチャレンジすることは私も賛成であるが、感覚だけでは何の価値もない。格調の高い生命ある句は決して難解や一人よがりではないという事を銘記してほしいものである。

会費 千五百円(昼食代)

主催 弓削川柳社

題と選者(各二句・11時×切)
 (津山線弓削駅)

第33回西日本川柳大会
 日時 昭和56年9月13日(日)午前9時
 場所 岡山県久米南町・中央公民館

兼題「脇役」

小出智子選

風船を吹いて病後を確かめる
 トランペット吹いてピエロの虚ろな目
 絵馬に吹く風へ無口になっている
 哀しみを吹いた母の火吹竹
 風が吹く度に恋人とり替り
 吹き溜り男の傷をかばいいい
 日の丸だ鯨は潮をそつと吹く
 仲人口少し給料吹いて言う
 悦郎 千代三 水客 君子 寿美子 潮花 憲祐 三十四

脇役に廻って言いたい事を言う

主役脇役歯車に誤差はなく

脇役に徹してからは芸が伸び

脇役は天狗の面をかぶらない

脇役が主役を食った芸の味

脇役で小金も貯めているそんな

脇役になれば本筋読めてくる

ツレ舞いの足袋の白さに負けている

脇役の妻が手綱を放さない

のはんとして脇役の味がある

入念に憎まれ役になる化粧

脇役がセリフの穴を埋めてくれ

影武者として正面の矢を受ける

ある日脇役あはらしなってくる

スポーツをあげて脇役あわて出し

ほんとうの友情脇役からもらい

脇役の涙科白はありません

脇役に廻って座長の目が光り

脇役で肩のこらない距離にいる

ひとつの雪脇役のところ知る

盲導犬無事に帰った尾が嬉し

脇役にまわると人柄光り出す

脇役の芸を盗んでいる主役

俺が居て主役が生きている誇りもつ

脇役が上座にすわる茶屋裏

脇役に恵まれ関白押し通す

車椅子もつ脇役にして置かず

脇役でせつせと夫の靴磨く

兼題「急用」

香川酔々選

急用の女車内でバフたたく

弘生

潮どきに女将はそつと座を外し

静馬

理想論潮の流れは日本の潮騒か

与呂志

春巳

急用も済みさわやかにトイレ出る

鬼遊

好郎

貴婦人が素足で走っている急用

岳人

洋敏

中座する急用ぼちぼち用意する

与呂志

瓢太

夢に出てきて急用思ひ出し

寿子

千代三

夕立が止んで急用思ひ出し

柳伸

寿美子

一合が二合急用をもつ忘れ

水客

水客

急用の言葉に隠れる卑怯者

吸江

武太

急用にしてはいそいそ早引きし

右近

酔々

急用のサイフ小銭がちようど切れ

史好

右近

急用と言うのはきつと落し穴

智子

天笑

関西弁あとで急用だとわかり

度

鬼遊

急用で二幕目やのに呼び出され

寿美子

度

急用が舌打ちして話し中

一二三

糸葉

急用があるから木馬降りてくる

小路

静歩

急用の男が忘れ物をする

作二郎

作二郎

急用の時に限らず家に居す

雀踊子

与呂志

留守番と知らず急用怒鳴りつけ

潮花

滋雀

早退の子の急用に気が掛かる

柳宏子

鎮彦

滝の音急用のある顔でなし

桐下

鬼彦

急用に出したへそくり帰らない

水客

英王子

棧橋の朝急用でないひと

好子

重人

急用を告げるマイクが平和です

作二郎

多志

急用かそつと牌をまだ並べ

水客

多志

急用にドックフードは忘れたい

潮花

射月芳

急用ヘドリンク一本飲んでゆく

小路

水客

急用も市電は停留所ととまる

英王子

智子

急用も市電は停留所ととまる

酔々

兼題「潮」

西田柳宏子選

竹原川柳会創立25周年

記念大会並に川柳作品展

日時 昭和56年9月6日(日) 10時

場所 竹原市竹原町「大広苑」

兼題 「鬼」「鍵」「劇」「皿」

「枕」(各一句)

特別課題 「おかげさま」 山内静水謝選

会費 千円

竹原川柳会

潮騒に閉じた思い出叩かれる

潮どきのない沈黙へ電話ベル

引き潮を待つているのは敗け戦

うず潮が胸のうずきを吸うてくれ

潮流を読む水軍の血の流れ

潮風が裾を吹き抜く佐度おけさ

渦潮の町に生れて情熱家

潮騒を聞く民宿にあるロマン

あげ潮にのるのが怖い小商人

潮騒へがんこに約束抱いている

ひたすらに待つ欲びへ潮満ちる

黒潮に働く声がする漁港

満潮で島の郵便夫が帰る

理想論潮の流れは変えられず

ひろしまの炎は日本の潮騒か

どんたく

好郎

鬼遊

雀踊子

吸江

糸葉

千代三

武太

水客

太茂津

悦郎

酔々

右近

与呂志

黒潮にのる椰子の実と丸木舟

海が泣く人がまた泣く赤い潮

二百海里潮に国境などはない

潮時のバトンタッチは軽くなる

満潮に帰らぬ父の墓がある

子を抱いた海女は乳房の潮を拭き

引潮に小蟹は浜へしゃべりに来

渦潮をまたぐロープにある自信

満ち潮を教えて母はあわてない

満潮になると鰯がかり出す

潮どきがきたか職人立ちあがる

潮時をはかって母が割って入り

満潮が女の強さを確める

潮引いて小さな企み見えて来る

潮どきに石橋叩いて悔残し

引潮のささやき明日の指針かも

赤潮に魚の呪詛も浮いている

潮がひくとき一通の置手紙

潮の速さ見る位置に建つ島の墓地

潮が引く明日をまじねに考える

ヒロシマ忌この日うねりをもつ潮

潮騒に女は憎めるだけ憎む

満ち潮が罪一つずつ消してゆき

潮引いたときに逆転考える

潮騒のリズム静かに今日昏れる

兼題「絵」

橘高薫風選

再軍備原爆の絵は削られる

絵葉書の通りの渡月橋を見る

絵のような景色で若さの足らず

老夫婦らしい絵になる迎え傘

寿美子

憲 祐

一三三

太茂津

雀踊子

潮花

三十四

武 太

英 子

鎮 彦

健 司

寿美子

与呂志

糸 葉

勝 美

凡九郎

君子

史 好

萬 的

作 幸

雀踊子

多久志

涼 一

柳宏子

射月芳

眉 水

柳宏子

小路

絵日記に親の知らない視野がある

汽笛尾を引きふるさとの絵を走る

踏み絵ふむ女はソツと眼を閉じる

三十年齢をとらない絵と暮らし

会場画として原爆絵画展

好きな絵を一枚持つて夜逃げする

絵の中のリングのように父黙し

絵になった狸門満の相があり

ゴーギャンの花も女も炎える夏

赤富士の楮に画伯賭けている

裏切りの絵は白黒で描いている

自画像を書くなら黒い墨にする

父の画布パン焼きのパン跳ている

大観の偽せものわが家ではばきかす

夏の夜たしかに美女の絵が動き

絵にならぬ姿でうどん喰べている

裸婦ばかり掛けて画廊はむせ返り

枯蓮は尼僧端座の絵に似たり

父の絵にいままだ登れぬ山があり

あれがれの雪山応接間に飾る

忘れたい影絵が消えぬ走馬灯

Qちゃんに紙治が並ぶ絵行灯

絵かきになる筈だったという詩人

絵にかいたようにはいかぬ仇討

絵から絵へ心変わりを試される

下手な絵のなかで安らぐ母の顔

母の絵を美しく描く母の死後

風船が割れてひとつの絵が消える

男と女の旅立ち春の絵のように

妻の絵が売れて嬉しうい苦がない

妻の絵を描くと他人の貌になる

美智子

規不風

千代三

どんたく

吸 江

天 笑

鎮 彦

弘 生

鬼 遊

静 馬

二三

右 近

桐 下

洋 敏

史 好

翠 光

千代三

萬 的

鬼 遊

悦 郎

好 郎

花 村

栗 一

健 司

太茂津

幸 子

智 下

桐 子

鬼 遊

智 子

昭和56年度大阪文化祭

第33回 川柳大会

日時 昭和56年11月21日(土)

11時開場、午後一時締切

会場 中央公会堂中集會室

兼題 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

「窓」 永田 帆船選

「道」 岸本 吟一選

「有」 西尾 栗選

「時事雑詠」 広瀬 反省選

「鳥」 墨 作二郎選

「解禁」 久保田以兆選

席題 当日二題

出句 各題二句、出句は出席者に限る

賞 府知事、大阪市長、府・市教育

委員長から「川柳賞」選者から

「選者賞」贈呈

会費 五百円(発表誌代含む)

アメリカでのんびりしている写楽の絵

谷内六郎海に木馬を描き添える

地獄絵の中で仏の目にに出逢う

殉教の絵の淋しさに慣れてくる

老眼鏡などはいらないピカソ展

戦争の絵をなつかしむ成上り

★

■訂正 8月号61P、栗選「正義」

黒帯で拓大に在る正義漢

千代三

お地蔵様

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

いずも川柳会

板垣 草丘報

漁火がまたたく女の瞳が濡れる
気がねなど要らぬ生れた家だもの
母が居て気がねが要らぬ里帰り
夢にくる水子の涙数珠を操る
慟哭の涙濡らぬ骨を抜く
高い壁作つて隣へ耳を立て
嬉しさを押えて口笛高くふく
空高く男があげたアドバールン
悲話一つ橋の袂で抱く地蔵
この橋だ思い出すまい過去だから
天草の旅は五橋を縫う眺め
古時計ネジを巻いたら父の顔
燃えつきて惰性の老いが巻く時計
巻紙の文字に人柄憶はせて
嬉し涙は笑顔が出て乾く
姑が嫁に気がねをして難
涙涸れ女に海が見えて来る
賛成が僅かに高い声を出し
ニューモード水着は一寸濡らすだけ

多賀子 シマヨ 早苗 芳子 夢栄 昭二 九二老 華村 代仕男 寿美子 軒太楼 みのる 明朗 独仙 寿恵 正朗 緑之助

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

新校舎落書き厳禁目立たせる
落書きがあつて古蹟を引き立たせ
色艶をほめて悔みを言うて去に
国体に下品な落書き消えてゆき
新緑におもねず枯色竹の秋
人慕うときの涙は真珠色
色々事情もあろうに咲くという
鯉のぼり色とりどりに風泳ぐ
チューリップに色分けされている畑
落書きにピカソ以上の出来もあり
メルヘンの世界を襖に書きなぐり
太陽が染め変え四季の花衣
落書きへ仁王もきつと身がまえる
青を切る飛行雲なら許される
パレットはどんな色にも夢を貸し
川柳塔まつえ 恒松 町紅報

タケノ 清泉 輝水 恒星 秀穂 志保 清夢 ふみ 敏明 醉夢 歳栄 鈴江 美栄 白汀 孝華 芳枝 寿美子 雪美 鉄花 みのる 早苗 耕草 正朗 愚童 芳子 快哉 舞吉 登美也

庭づくり物言わぬ石に味があり
ブルの音眠る文化を揺り起す
八時間とにかく眠る自己管理
湯上りの女美しい嘘を抱く
お百度の涙も吸いた石畳
上品に喰つて西瓜の味が無い
異端者のこつく上品なのがひとり
上品な女が自我を覗かせる

川柳たけはら

森井 蒼居報

嘘なんか言えない澄んでる瞳と出会
持つべきは友達ことばを足してくれ
手のかかる年子へ本格的な梅雨
一年の成長ゆかたのあげおろす
海の面を照して月の豊かなり
子を放し後を向いてはならぬなり
ペアルック我が家は心のペアを着る
母の持つその子その子に火吹竹
中流の灯りへローソンのしかり
鬼の面父とわかつている恐さ
高校が近づいてきた模擬テスト
二条城うぐいす張りば音楽家
じかんぎればくのおなかは持っている
メダカの目太郎花子の瞳となりぬ
休養をたまにはとれと雨の音
生きてゆく手段に貌を二つ持つ
グリーン車に一人坐っている孤独
歩く幸歩いてるから気がつかず
どちらにもつけず相づち打つておく
空論にしない火薬のひとつかけら
通りやんせ帰りはこわい風が吹く

川柳ねやがわ

高田 博泉報

みつこ 由郎 三和 鶴丸 与根一 巡歩 孤呂二 町紅 貞子 静水 富喜恵 比呂子 鈍舟 笑子 靖子 洋之祐 節夫 蘭幸 中三愛 小六紀 五才方 昭不 朽居 房子 菁居 一路 かつ子 秀水 かつ子 里香

夕陽落つ雲の赤さに耐えかねて

光夫 英千子

ライバルの盲点なかなかみつからず

あいき 右近

秋風が吹けば錦の道に成る

鈍 亜

枯葉などほくにはなくてエバグリーン

度 鶴声

コマーシャルうんとわきびが効いてくる

入仙

バケツリレー原案室で甦える

薫風

マスコミに目をつけられたのが落ち目

柳久

藤の色葵祭りをまだ知らず

山歩

けっべき女に盲点あるグラス

青波

妻の留守コーヒに入れて舌鼓み

勝美

連休の留守をあずかる鯉のぼり

一蓐

民主主義国の歴史を書きかえる

マサノ

盲点とは自分に見えぬことと知り

成美

コマーシャルドラマの中へ二度三度

綾子

荒野みた心にやがて青空の

消費者が背負わされてるコマーシャル

連休のツケが暮しに波を立て

洋茶

十重二十重花で包んだ吉野山

シマ子

盲点をつかれて煙草に火をつける

好子

盲点のない人でまだ係長

花世

内祝南天の葉もそつとのせ

琴音

値上げ批判女ちつとも瘦せてない

一途

ワンマンの盲点妻はちゃんと読み

晴風

早春の若葉と共に恋芽生え

野生

信号にうけるさい奴が横に居る

亜成

出来すぎている計画にある盲点

亜也子

やんわりと盲点ついてくる税史

西岡

意地悪な目が盲点をついてくる

洛辭報

善紫

百貨店夏のムードで客を寄せ

川柳大阪

西岡

洛辭報

善紫

切り札は涙の武器で攻めて来る

酔花

雨の駅通を待つのか傘二つ

ひろ子

野放しの通り魔どうにもならない世

雅果

来年も生きるつもりの旅子定

喜洸

カラオケの声を記念として遺し

秀峰

住所録浄土へ立った人を消す

九平

白を干す竿がまぶしい梅雨晴れ間

洛醉

おにぎりの最後は自分の口に入れ

敏

真昼間鯛のつくりで飲む浮気

与志

反論のインクは赤に決めている

天樹

切り捨てにされて不満なコンマ以下

六龍子

梅雨空へ蛙の卵まだ鳴けず

喜醉

妻を抱くにも価値観がよくなるやつ

本蔭棒

三角に三角に折り千羽鶴

笑風

外人になつて日本語の難しさ

弘生

外人にどうにも判らぬかくし味

眉水

抜群の器量が乗せた玉のこし

金太

抜群の勘に浮気も出来ず老い

道子

京都塔の会

松川

門付けのお吉へ雪の音沈む

杜の報

明けきつて灯台の白さうすれおり

潮花

枯山水むかしの風情今にあり

求芽

美しい尼僧に会釈されただけ

芳子

紙魚にみな読まれたらしい古日記

紫香

時刻表練れば心は旅の人

明代

味噌汁へ夫婦の舌が肥えてくる

遊香

重なり合う石唯それだけでよしお庭

杜客

夢に出る故郷はいつも母がいる

いさむ

栞酒で乾杯木の香が咽喉をこす

弘三

栞酒の折も当確待っている

飛鳥

栞酒をこぼしてみせる舞台芸

白李

サービスの新茶を吞ます紺がすり

花代子

冷えた茶がとくに見抜いた初対面

白漢子

あるときは富士も怒りてぶつつける

美穂

感動の富士が迫ってくる車窓

三求

大沢崩れに富士の男の貌を見た

萬的

辛棒が撮った日本一の富士

誠史

川柳わかやま

堀端

手おくれをじつと見つめている折り

三男報

ときに哀しく胸に沁みいる祝いの酒

緑楼

大空へ女の意地を噴き上げる

芳朗

手おくれを励ます苦い世辞一つ

規不風

手おくれを承知我慢の父で逝き

克子

手おくれへ不孝を詫げる金が着き

柳宏子

手おくれた愛今さらの年になり

勇太

なだめても手おくれ妬心もえさかる

稚代

丹念に磨く残りの一本歯

三千代

手おくれと知りつつ聞き入る美顔術

公子

臍を噛む頃に詐欺師の祝酒

武雄

手おくれの返事も逆に効奏し

悦子

方言も交る祝辞が和をひろげ

すみ子

食卓にもる祝福をこわすまい

武太

祝杯の嬉し涙も共に飲み

茂子

青空が見てる廊下に立たされる

秀雄

若人の虹紺碧の空にある

双木

乱気流を抜けた二人の結婚歌

登紀夫

祝うより心の通いはしい喜寿

かね

銀行の粗品ですます祝い箸

賀寿子

にた川柳会

西村

あの方のことに女医がそつと触れ

早苗報

まよ中の男の涙知る布団

登美也

そつ言えは貞操の文字目につかず

鉄花人

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

獨仙

雨女雨の休日あくびする
 軽石を意識しながら又拾う
 衣替え身軽になって初夏の旅
 整理してみても女が独りだけ
 旅の宿百円入れてコーマシヤル
 嚙じられて尚強靱な父の脛
 若人のマナーへ山の怒り買い
 握られてそれから乳房疼き出し
 婿殿に父と呼ばれて馬鹿となり
 炊きたてにコツンと玉子おとす朝
 見栄を張る肩へ後押ししてくれず
 他人の眼に一緒の時間が長すぎる
 言訳はさすがにうまい年の功
 広縁を出し孫の夢遊はせる
 天職にしても不満の捨てどころ
 かげ口が気になり嘘だとも云えず

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

きみえ 孝華 龜甲 嘉寿子 幸一 栄 花子 夢醉 裕 三和 雄々 弘女 寿美子 緑之助 早苗 美子 雅風 喜風 弥山人 鎮彦 湖風 三十四 かずを 良京 文秋 勝美 儀一 慶三

古くても母が磨いて来たタンズ
 かたくながとけたか面に光るもの
 英語より手真似の方がよく通じ
 盃を持つ手を真似て父徳ぶ
 バントマイグ上手におしやべりする両手
 川柳化粧 植村客遊子報
 訪米の土産総理の手に余り
 貧富の差もなく雪は屋根の上
 本心はかくし握手をしして別れ
 父の旗下ろして妻を泳がせる
 適当に出来ない歳が若すぎる
 ひと騒ぎ主従遅れた披露宴
 得意顔私の心知つてない
 常連にマダム好みの酒肴
 逢うのではなかった文通だけの女
 花びらもグツとのみ込むコップ酒
 時ならぬ電報もしやと胸騒ぎ
 あした咲く風を枕に詰めて寝る
 ひな人形母娘の歴史脈々と
 咲く花を折らせたくない文ころ
 その人の愛をかぞえて化粧前
 勝山双葉川柳会 河野 君子報
 初夏の句青いもみを添えて出し
 メーキャップすれば背筋ものびてくる
 限どりへ役者は生命もそぎ込み
 セールスに任せた化粧他人めく
 メーキャップ素顔を奥に奥に置く
 定年後も髭は律儀に伸びている
 棒グラフ伸びず靴だけ伸びてくる
 ストレスを長い電話で取っている
 混線の電話なにやらもめたはる

孤舟 頂留子 弘生 雀踊子 紅月 秋詩 岳香 葉香 奮水 実男 越山 永楽 大鷹 拍秋 三青 白李 遊香 多津 客遊子 君子報 智慧子 芙佐女 千里 妙子 藤子 智子 楓楽 喜代美 愛子

断わりは電話で済ますことに決め
 カラフルな傘で雨でも翔ぶつもり
 虹色のセーター編めそう雨の糸
 上がるまでと話相手を引き止める
 一本にそわせる雨も苦勞人
 あじさいの彩少女にもどる雨が降る
 地下街の他人と飲んでる俄雨
 川柳ささやま 河原みのる報
 踏まれるより摘まれる土筆になんて
 チャッキリが茶摘娘を詩にする
 秀才の芽を摘みとられたへそまがり
 雑談の中で決め手を拾うて来る
 棟上げの木工決め手を忘れない
 歩を二枚持ては決め手にこと足りる
 決め手なら何時でも出せるふところ手
 決め手欠く助役の腰の低いこと
 商才の無い先生の靴がちび
 せてて子は先生にしたい泥に活き
 虹画く乙女なに摘む夢の野で
 平和への鍵はしっかり良い嫁女
 年長の鍵預かって未だ達者
 腐植土を散らして散らしてカブト捕る
 名利も檀家泣かせの屋根腐る
 駒つなぎ川柳会 里 小路報
 爽快な気分古釘抜けました
 いまさら女に女の過去を何で訊く
 肝臓のうたが晴れたコップ酒
 追求のペンは休むこと知らず
 肝臓に叱られながら酒の好き
 肝臓の痛みは云わぬコップ酒
 肝臓もボトル2本には慌て

静香 久子 洋子 いくの 頂留子 節子 君子 百合子 宗珠 和子 千代子 法齊 文平 笑女 ひか平 可住 みる ゆう也 一盃 靖子 素水 久子 健司 鬼遊 天笑 醉々 雅風 規不風 小路

肝臓の補強をせよと云うカルテ
肝臓の弱りを女將に勞わられ
全快をした肝臓はいたわられ
頑張りがついこじらせた肝硬変
肝臓の力の字も知らず医者知らず
肝臓を病んだを悪友のせいにする
里からの荷物につまる親の愛
大風が吹くと手形が行き詰る
スケジュール詰まっていますとこわられ
ゆき詰りになった相談叱られる
息詰まる部屋三月の一騎打ち
生活の不満を詰めてあるかばん
他人様の知恵も詰めてあるいくさ
オーエスケール川柳会 大坂 形水報
オフコンが伝票奪って行く職場
めくら印押してる様ですと目
命取りになる伝票にめくら判
寒風へ梅の蕾は首を振る
桜だより季節外れに迷い込み
弁解が出来ぬ狐は悪にされ
いさかいても梅の蕾は望み持ち
伝票を手にした者が払わされ
洞穴を離れた狐は戻らぬ氣
上げ巾を賣が裏打つ自信顔
値上げした物の値打ち下りきみ
伝票の一枚ナンバー飛んでいる
正直な狐に生まれてだまさない
伝票の数字社運を話しかけ

虹川柳倶楽部

新岡回天子報

千代三 萬の 柳伸 潔 桐下 柳宏子 茂子 元紀 頂留子 宏子 信治 美代 雀踊子 形水報 登泉 度 博 夢 一 光 米 亞 上 清 形 弥 好 一郎 治 一 竿

この虫を殺しや綺麗な蝶はない
同年の知らせが届き老いの父
追切手貼つて葉書の梅雨だより
潔斎し泥田に植える御神米
まん中をちよつと外してはめ上手
母の日も田植父の日また田植
妻の座も母も忘れて湯に浸り
父の日に休める父は果報者
虫干しのここにも一人日なたぼこ
岸和田川柳会 植山 武助報
こつそりと云うから話が秘密めく
呉れるだけ吞まぬ柴をためて老い
老残のエゴに気付かぬ天の邪鬼
夫婦らし電車の中の手話はすむ
山荘へバス登りくる若葉道
ファイトを出した成果で家が建ち
もつすこしファイトがあればと親のぐち
痛恨の人生ひとり草を摘む
提案のひとりに賭けてみる社運
ひとり生きる女に耐える事多く
雨残る柳をかすめツバメ飛ぶ
絵心を誘う湖畔の花菖蒲
思い出の雨になるかもうれしい日
ひとりずつふえて踊りの輪がふくれ
風月を友草庵に一人住み
生きのびた男に疼く傷がある
今日では一人女は強くなる
ひとりですドラマ此処から幕があき
ひとり住む自由も何処かわびしくて
ひやかした肩に乗つかる植木鉢
絵日記の桜はせめて散らさない

虹汀 回天子 勝一 四郎 義美 千代 正敏 久仁於 富志子 富志子 甘平 世界人 信雄 波津 加代子 善吉 浪速子 せつ子 民治郎 さよ子 武助 加仙 射月芳 幸代 辰雄 白光子 操子

佳句地10選(前月号から)

井上柳五郎選

指切りが出来ぬ大人の指になり
横道にそれて人生の裏も知り
事実は勝てず重たい口ひらく
君が代を唱う素朴さ持つている
知りすぎていて盲点が判らない
こみ入った話へ嫁が除外され
まん中に生れて損することばかり
掴み合いの味を羨む一人つ子
待つという言葉に女はだされる
腰くだけやはり良心あつたんや
凡九郎

川柳しんぐう 川上 溪水報
貧しいが情けは人の倍も持ち
更生の庭に情けの裁き下り
先代の情けが光る店の危機
せめてもの情け貸付けマッチくれ
情けある人へ心の底開ける
老農の歎美しく夕焼ける
真剣に友かばう子の瞳がきれい
心練る有終の美をかざりたく
美しい嘘で大人の童話塗る
美しい妻で一人にしておけず
ついでは思えぬ仕度の母が来る
嘘一つついたついでに嘘さがす
呉服屋はついでに母も口上手
白光子 幸 英子 正博 まさ子 十郎 利凡 富太 勇 子

プロ意識へついでにやれがカチンと来
手土産がないのでついでに来たとい
産卵の亀の涙にある祈り
卵に目鼻何と可愛い知恵遅れ
卵割る修業も三年調理人
花嫁は卵に目鼻と云う仲人
手品師の袖から卵こぼれおち
くしま川柳会
黒川
タバコ断つ夫ゴロリと昼寝する
祖父と孫同じ形で昼寝する
主婦ちよつと体をよこにする昼寝
昼寝して夜へフアイトためている
家の中別れ別れする昼寝
掌の砂ちからなく落ちてゆく
勝力士足の裏だけ砂がつき
幼児のいちばん好きな砂遊び
砂浜もコンビナートになる故郷
沖繩の砂はいくさを知っている
偶然に指ふれてからほぐれ出し
生甲斐を感じ点字に触れる指
湯上りに夫は麦茶妻ビール
蝶を追う夢の中なる青春譜
降雨率肩をすはめる気象台
湯上りの幸せ肌につやがある
欠伸して涙のぬくい日の孤独
企みの男は絶えず微笑する

大阪川柳会

中川

滋雀報

弘生 明男 雀踊子 笑三 二郎 二 三 武 太 紫香報 ハツエ 春子 子え 千子 貞子 唯夫 伊三郎 まさ 晴子 和子 紫香 幸子 玉子 保蔵 美智子 牧郎 郁栄 智子 鎮彦 善紫 好一

むき出しの男にさせる隙があり
むき出しの男に海の詩がある
向う傷の男は過去を語らない
向うにも云い分があり五分と五分
銃口がこちら向いてるノイローゼ
昔むかし故郷の山は青かりし
昔ばなしアニメから聞く核家族
私にも十九の春がありました
負けそうになると昔の事にふれ
ネグリジエ替えてもムード出てこない
素晴らしいムードで木曾は霧の中
ふたりのムードに打算寄りつけず
不快指数一〇〇むしむしの通勤車
むしむしとする夜は事件ありそうで
むき出して小使い渡すのも身内
城北川柳会 川口
修学旅行 一睡もせず始発
定年の終着駅は始発駅
特別な席で代理がもじもじし
特別な配慮も三度目とも貸さず
特別に嬉しいお酒が塩辛い
ジーンパンが一人混った盆踊り
省エネの電気テキパキ消している
特別に好きでもないが添いとける
ご敬進 特別席へまつりあげ
祭笛近しあなたの浴衣縫う
腕相撲息子に負ける歳となる
二つ三つ定期のとしを若く見せ
温泉でやせた肥えたと羨しい
飲み過ぎを咎める人がいてくれる

滋雀 悦郎 文秋 勝美 節度 千梢 楓楽 あいき 頂留子 久子 醉々 柳伸 柳宏子 綾珠 道子 三十四 午郎 利義 満津村 秀村 静歩 登志代 公一 星斗 喜洗 ひろ子 千子

鮎が来る解禁が来る父の卒
憶えてはならぬ言葉を九官鳥
信じない運勢欄を今日も読む
娘の受験特別暑い夏となる
雨に濡れ菖蒲女の性をもち
父の日も働きさして悔とせず
菜の花句会 高杉
板削るうち本物になってくる
フェスティバル出て竹葉で待つ話
がま蛙一席申し上げそうで
掴もうとすればトンボに羽根があり
本物が一つ家紋を重くする
幸運を掴む手相のまき終り
じゅうたんの廊下で靴が落ちつけず
本物の鬼は涙線持っている
山男花束掴むように持つ
心中した廊下に鉢が置いてあり
岸和田に負けじと杭全の鉦太鼓
とたんばに來て本物は立ち上り
姿見の中で女は自惚れる
辞表書き廊下で一度読みなおす
扇風機皆外に向け日本橋
寢屋川市
稲葉好子さんより
故稲葉鳩花氏お供養として
金一封
拝受致しました。
川柳塔社
射月 健司 茂雄 与呂志 頂留子 鬼遊 好子 醉々 柳伸 弥生 悦郎 糸葉 栗風 薰風 右近 美恵 松太郎 テルミ 炉斎 戸斎

本物の味方はゼニをほしがらぬ
遠泳の太鼓へつて来るくらげ
参観日廊下が少しやかましい
本物の一万円札でうたがわれ
南港で釣った魚は猫にやる

川柳後集

井上柳五郎報

いつから余生と云おう日々多忙
飲んで食うだけの余生がここにあり
種牛の余生疲れた顔で生き
晩酌を止められ余生狭くなり
台所扶養控除の皿の数
病む妻に馴れぬ粥炊く台所
好物の匂い嬉しい台所
台所もとの二人へ灯がちさい
一日を無事に終った厨の灯
待ち切れぬ顔がのぞいた台所
姑の意見が通る台所
年齢をこまかす化粧に罪があり
枯れて落つ年齢にはようぬ天の声
年齢を聞けば驚きますわよ脚を組み
新聞にのつたばかりに年齢がばれ
年寄りの声ははずんで年の教
年齢に負けて土表を去る力士
岸壁の母も冥土で息と機嫌
一ぱい機嫌が二次会で氣勢あけ
御機嫌をうかがうての下心
オーエスケー川柳会 大坂 形水報
梅雨空が男のロマンをかきたてる
肩書きがはずれて父のいい寝顔
甘えたい時の父親鬼になり
駅前にまさかの妻が待った傘

雀踊子 鎮彦 度 岳人 不二夫 定平 秋月 青銅 鯉虎狼 和夫 柳五郎 玉水 哲郎 博友 照路 恒洋 草風 佐加恵 久米雄 幽谷 梁太 番茶 七面山 形水報 秀川 登 光男 一扇

若いけど後姿は老いた父
ないものはないで済ませるガラス張り
危機感を感じる企業のカラス張り
夜が明けて眠りに帰る労働者
睡眠薬夜明けになって効いてくる
夜が明けてみれば煩悶ばかりしく
反対も賛成もせず父座る

堺川柳会

河内

天笑報

火のドラマ流れ流れてきた砂漠
動作までどこか似てきた後家の猫
石畳むかし遊んだ廊の灯
庭の美をささえる石の息づかい
開発の流れにのつて家が建ち
ドライエモン神輿かついで夏祭り
明治大正昭和を生きた招き猫
炭焼いて人の流れに遠く居る
流れ寄る七夕笹の恋を読む
オイ教頭その髭顔に負けている
流されてみよ優しい人に会う
関係がないのに流れ矢が刺さり
石投げて女波紋の外に居る
船着場の石に名残りが書いてある
欲捨てて石仏に似た笑みになる
とむらいの歌が流れる交差点
にんげんに蹴られた母が哭いている
夏雲の気懸りになる母の旅
やがて流れは二つに分れてんと虫
男はいつも流れの中で勝負する
よっぽどの事情が夏に式を挙げ
夏大根母の角度に干してある

川柳ねやがわ

高田

博泉報

順一 博泉 幸坊 亜成 形水 好郎 入仙 素灯 甘平 左久良 夢遊 てるよ 山久 幸太郎 たつお 茂美 東雲 月子 紀美子 千乃子 作二郎 一二三 健司 鬼遊 与呂志 天笑 弘生 岳人

舌つずみうって仲間の輪がほぐれ
紙幣積んでエリートコースの切符買い
雨反に名所が出来る花しよぶ
雨の日は陽を恋い照れば雨を乞い
花菖蒲青春日記に色をつけ
外食慣れ舌も氣ままになつてくる
招待の切符は高いものになり
毒舌も聞こえぬふりて城守る
二号にも妻にも程良い舌を持ち
妥協見ず沈黙のまま朝の音
噴水に負けじと子供抱きあげる
噴水の向うで俵せはていて
粗金の心を磨けと坊主言う
出雲はんの機嫌損ねて嫁き遅れ
舌打ちを聞いて小言をやめている
思いきりしゃべって乾き切った舌
弁当のついた切符が狙う票
運命を決める切符と知らず買う
叩いた鉄も火を噴く世の習い
鉄の意志骨も抜かれたまま平和
鉄筋の床から聞えてくる挽歌
ちよつと舌すべらせ本心覗かれる
折角の油を売って原子力
招待の切符に料金書いてある
美しい語尾を噴水からヒント
いろはのい知つて舌が動きかけ
七十歳の抵抗派手な色を選ぶ
噴水の前で省エネ考える
核隠す有刺鉄線磨いている
父の日は家宝の鉄瓶湯がたぎる
胃カメラの光る壁面にたじろいて

山久 満津子 勝美 一善 ふみ 博泉 清香 シマ子 花世 雪枝 琴音 洋茶 晴風 野生 一念 敬山 一途 亜也 亜鈍 右近 光夫 英壬子 三千子 度 柳宏子 醉々 鶴声 静歩

募集

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 正本 水客 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「相談」 菊田 いさむ 選
 「版面」 福田 保子 選
 「底」 川村 映輝 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内、文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 正本 水客 選
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
 課題吟 (各題5句以内)

「限度」 白岩 文衛 選
 「景品」 伏見 茂美 選
 「肩」 河合 茂雄 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、★用紙はなるべく柳箋をこ使ってください。

9月の常任理事会は3日5時から

定価 五百円 (送料45円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)

昭和五十六年八月二十五日印刷
 昭和五十六年九月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎
 印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二丁目一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
 電話 (六六九) 六九一四番
 振替口座大阪・三三三六八番

本社九月句会

日時 九月七日(月) 午後六時
 会場 金属会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番

兼題 「馴染み」
 「釘」
 「手」
 「星座」

席題 二題 当日発表
 各題三句以内厳守

川柳塔社

★投句は句箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

11月の兼題 「灰」 「通る」
 「無」 「限」 「間」

本社10月句会は4日 (詳細は30P)

尼崎市 秋の文芸祭

川柳・雑詠二句 (未発表作品に限る)
 9月30日。はがきに種目を朱書き、作品と住所、氏名(ふりがな)、電話番号明記

投句先 〒660 尼崎市東七松町一丁目五十二〇
 市教育委員会教育課宛
 伊東静夢・北浦牧郎・萩原金之助・奥田白虎・森田栄一
 11月15日1時 尼崎市、立花公民館 (阪急塚口駅西一〇〇米)
 市長賞以下二十位まで、出席優先

賞 発表 選者

編集後記

▼心齋橋南詰のバルコ・ソニータワーといった超近代風の建物の東寄りに中島小児科診療院があり、その二階に川柳塔社の編集室があった。二つ並んだ事務机に

一三夫さんと葉子さんがおられた。一三夫さんの姿がないときは、僕や誰彼が腰掛けた。窓からは前のビルが見え、車や人の流れが絶

え間なくあった。

▼ここから、昨秋は一三夫さんの姿が消え、この六月限りで葉子さんもおられなくなりました。そして事務所は阿倍野へ移転した。十六年の歲月、百九十一冊の川柳塔が送り出された。

▼川柳塔の流れは一瞬も留まることを許さない。幹部の諸氏は勿論のこと、この際、吸江・悦郎の新顔、岳人・天笑・健司・鎮彦らの若い力に負う所が大であつた。

▼新事務所は格別分りやすい場所なので、大方の訪問欲談をお待ちします(薫)

▼「吾輩は猫である」は、漱石の代表作の一つとしてあまりにも有名。漱石の家には迷いこんで来た黒猫がいた。この猫が、いわば作品の中の狂言まわしの役をつとめる。この黒猫が死んだのが明治41年9月14日。漱石は、この黒猫の死亡通知をはぎにしたいため、小宮豊隆や野上豊一郎二、三の友人知己に出している。

「昏知猫儀久々病気の処、療養不相叶、昨夜いつの間にか、うらの物置のヘッツイの上に逝去致候。埋葬の儀は車屋をたのみ、箱詰にて裏の庭先に執行仕候。但、主人「三四郎」執筆中につき、御会葬には及び不申候」

なお漱石は弔句として、「この下に稲妻起る宵あらん」と詠んでいる。(酔)

▼朝日新聞夕刊の「素粒子欄」に「サラリーマン、四人に一人は単身赴任。かくて家庭裁判所と駅前の飲み屋が大はやり。」とあった。この欄は、十四字三行四十二字で、時の政治、経済、社会等を痛烈に諷刺するので川柳味があつて楽しい。

ここで「四人に一人」とあるのは財団法人労務行政研究所の調査結果による数字であるが、後半は記者の想像から生まれたもので事実ではなからう。家庭裁判所と駅前の飲み屋が出てくるところが何とも面白い。川柳の面白さもこんなところにあるようだ。最近の世相

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



高島屋
大阪・東京・京都
なんば・日本橋・四

は、暗いニュースが多い。現実そのままで息苦しい。発想の飛躍によって明るく生れ変りたい。マジメも悪くないが、ハンドルの遊びも必要だ。(き)

▼「女性自身」という週刊誌が創刊されたとき、その突飛なネーミングに、ぼくは腰を抜かしたものだ。ところが時が経ち、馴染みが深くなるにつれて今では何の抵抗も感じない。

▼「粗大ゴミ」にも同じことがいえる。そもそもゴミとは本来、小なるものは

ずで辞書にも「使つて役に立たなくなった紙クズや食物のクズ、その他の廃棄物」とある。まだ使用可能な家具や電機製品はゴミとはいえないから何となく矛盾した造語だが、その矛盾したところに一種のおかし味がある。

▼ところで四〇過ぎて、あの方がダメになると粗大ゴミなどといわれるそう。男にとって、ますます、つらい世の中になってきた。(史)

肉体疲労時のVB₁₂補給に

アリナミンA

アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

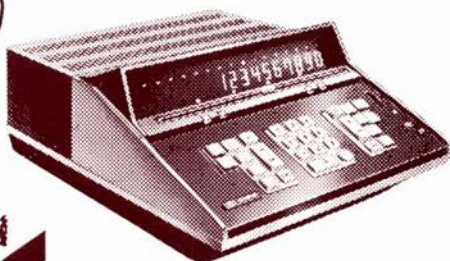
武田薬品工業株式会社 千541 大阪市東区道修町2-27



昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十六年八月二十五日 印刷
昭和五十六年九月一日発行 (毎月一日発行)



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 IC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリ高級品

SANYO 三洋電機株式会社

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴
南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551